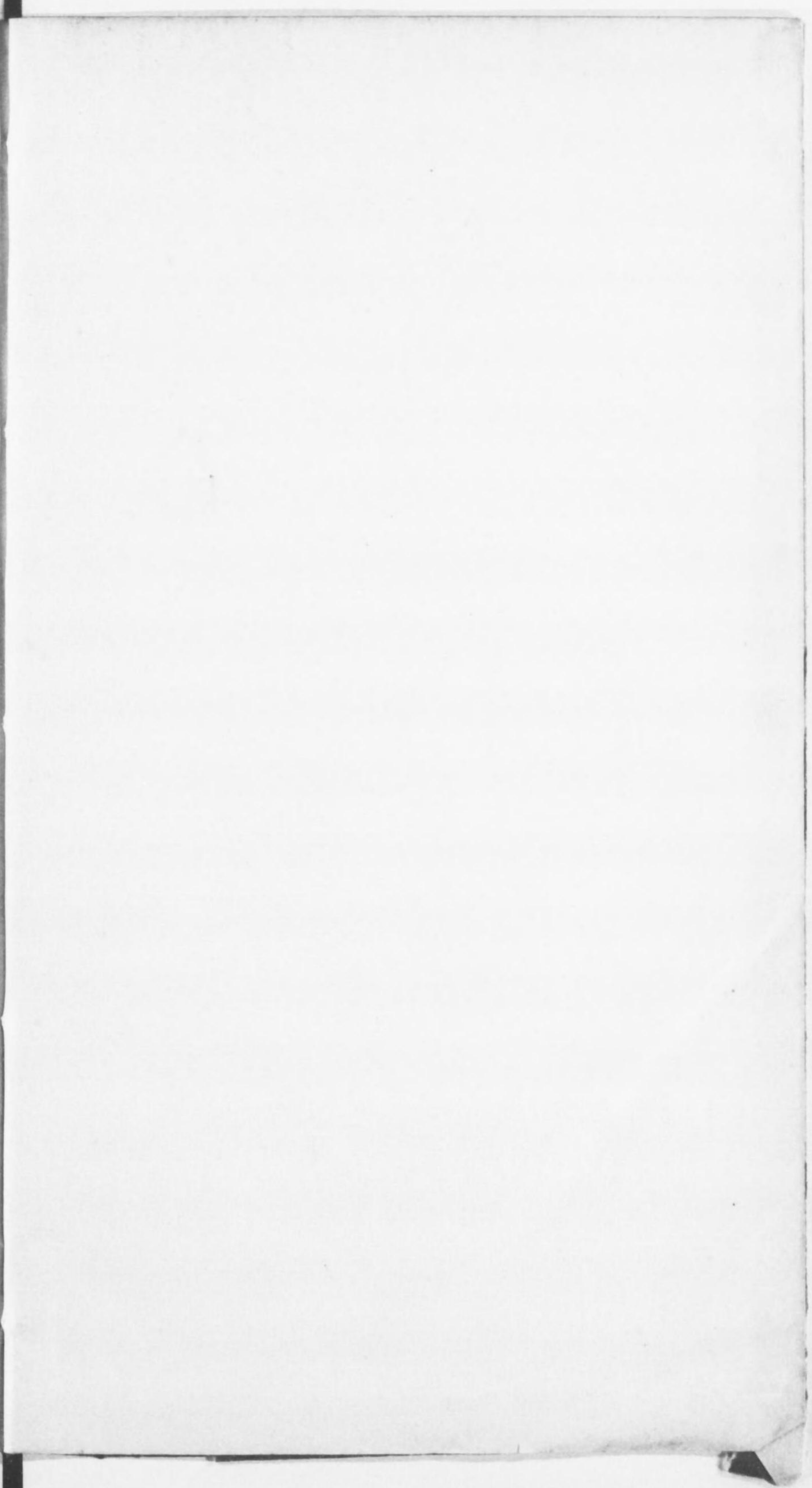
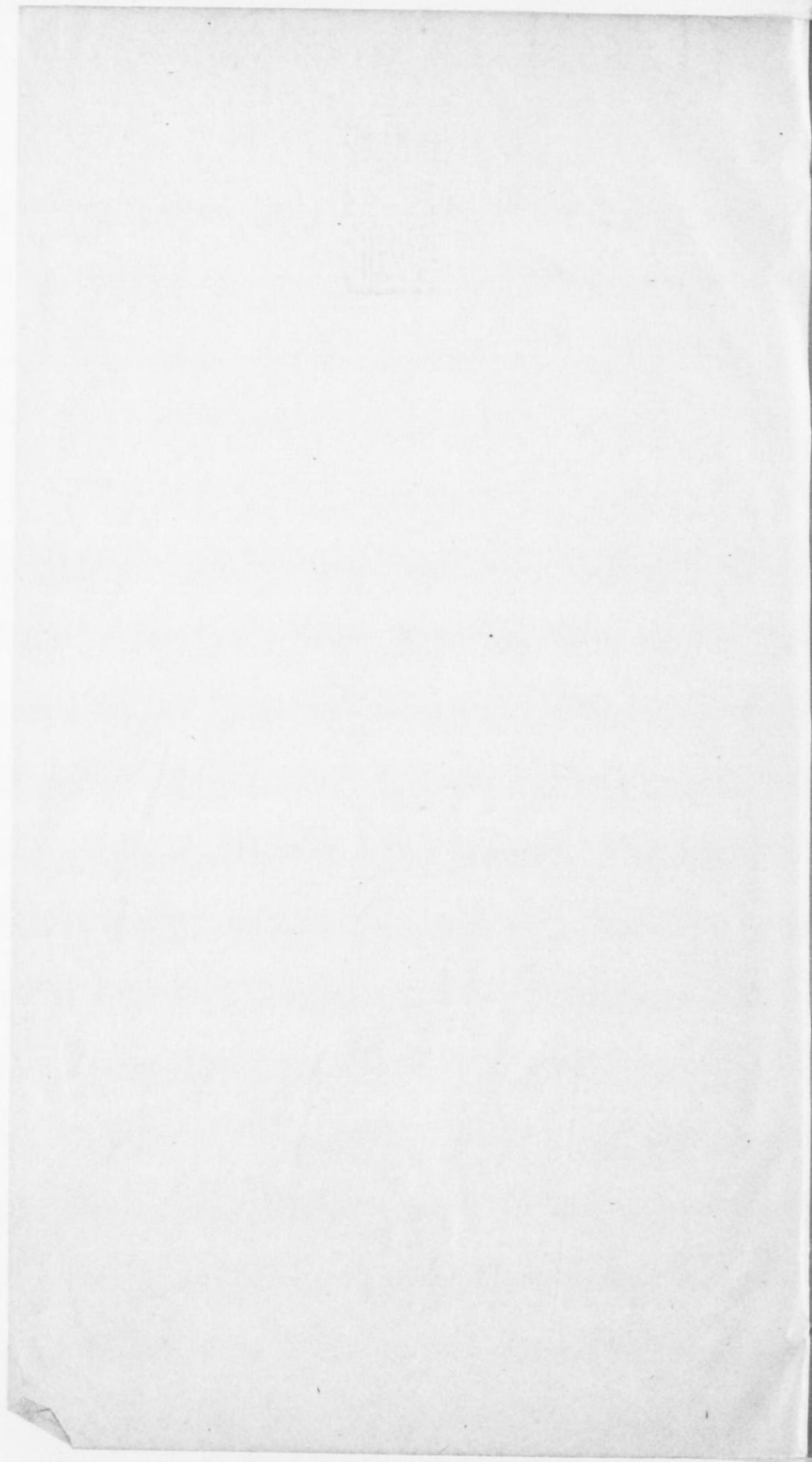




0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始







複雑なる精神内容を表現するに 簡樸なる原始的形式を用ひ 叙事述情 縹渺としてその境に在り 琴瑟としてその事に接するの感あらしむ 洵に能樂の表現は 東西にその比儔を見ざる高次の藝術にして 又日本文化の綜合潭融の極致と謂ふべし その主觀的表現に内在し 象徴せらるゝものは 卓秀優美なる日本の文學想念の結晶なり 幽玄深遠なる日本の哲學思想の表象なり 剛健雄大なる日本の精神氣魄の發露なり 蓋し近代文化の播藍期たる室町末期以來 深く上下に愛好せられ氏族趣味の最高表現たりし所以と稱すべし

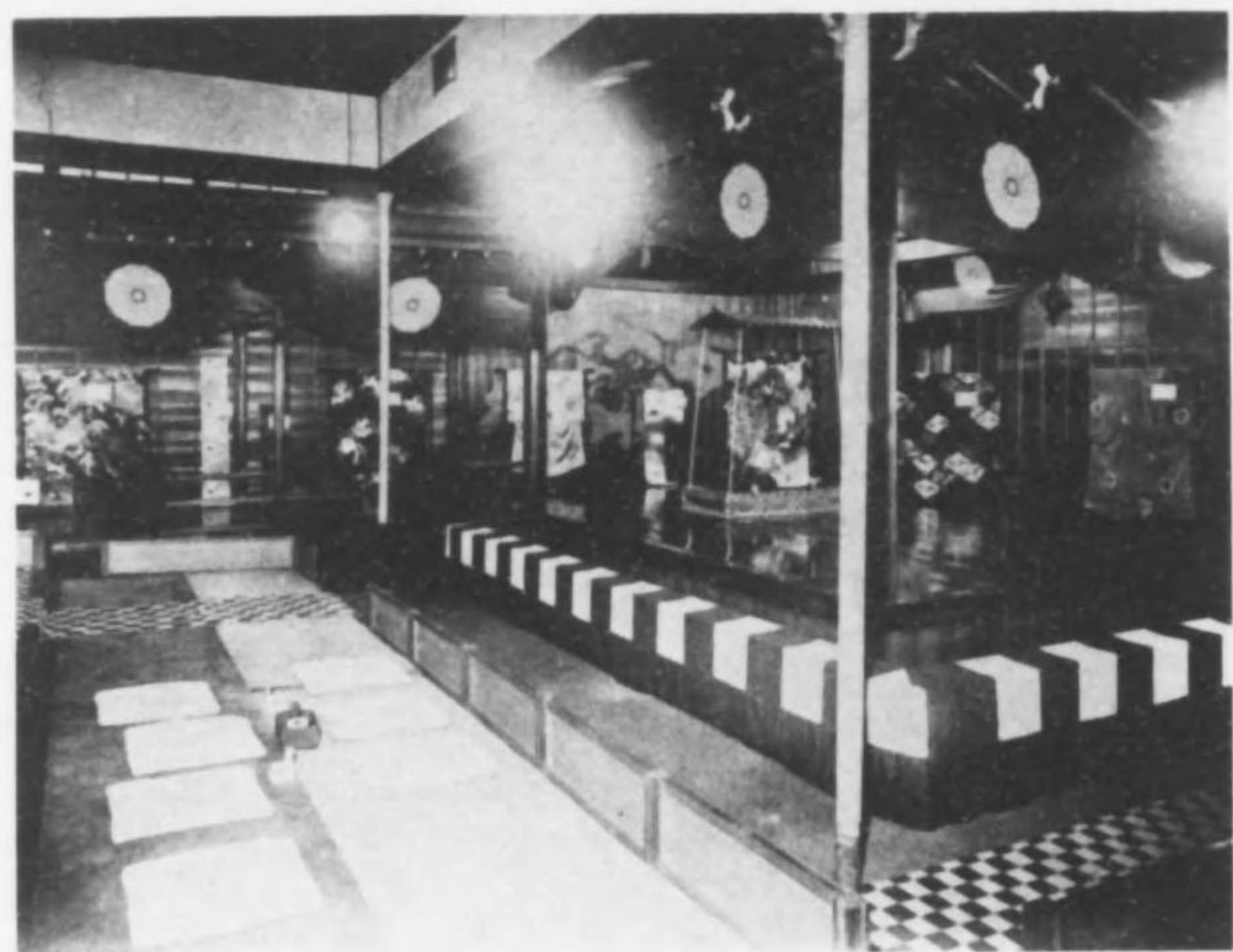
輒近日本精神の勃然たる興隆は 日本文化の卓遠を強く再認識せしめ 能樂の精神が近代人の共鳴と憧憬を促せること寔に喜ぶ可し この近代理念に合致せる能樂精神の象徴を以て 服飾流行の基調たらしむるは よく近代の理想を具現し 近代の意識を表明するに極めて適切なる 何ぞ多く言ふを須ひん

安藤商店 茲に見る所あり 能樂の精神内容を服飾意匠の上に應用するに 能樂の真髓たる幽玄の概念に制限せられたる寫實主義の本旨に違由し 能樂藝術の外面的模倣を以て足れりとせず その内在する主觀を檢討し その象徴する精神を把握し 傳説文化の綜合的表現を現代理念に陶冶して 新機杼を成し 新境地を拓かんとし 竹内知治郎氏をして新に制作せしむ これを具きに見るに類型を脱却し 新穎を創造し 蔚然として現代流行の偉觀を成せり 能樂の真諦をして近代感覺に新求したるもの 未だ斯の如く明確深刻なるを知らず 斯道に志す者 以て好指針とすべきなり 囑に依つて巻首に寄す

昭和十年初秋

報世道

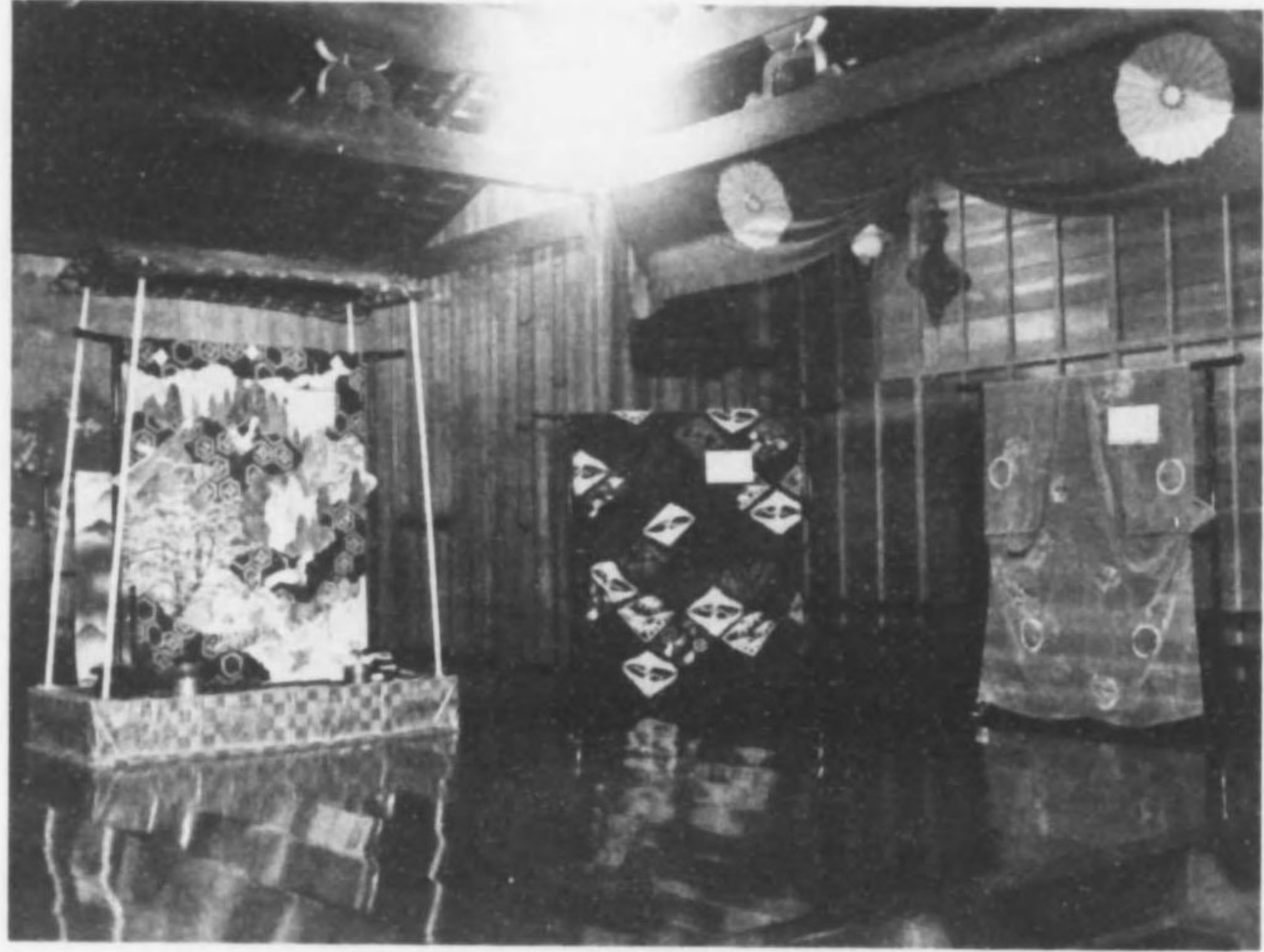




第一ノ列陣場會



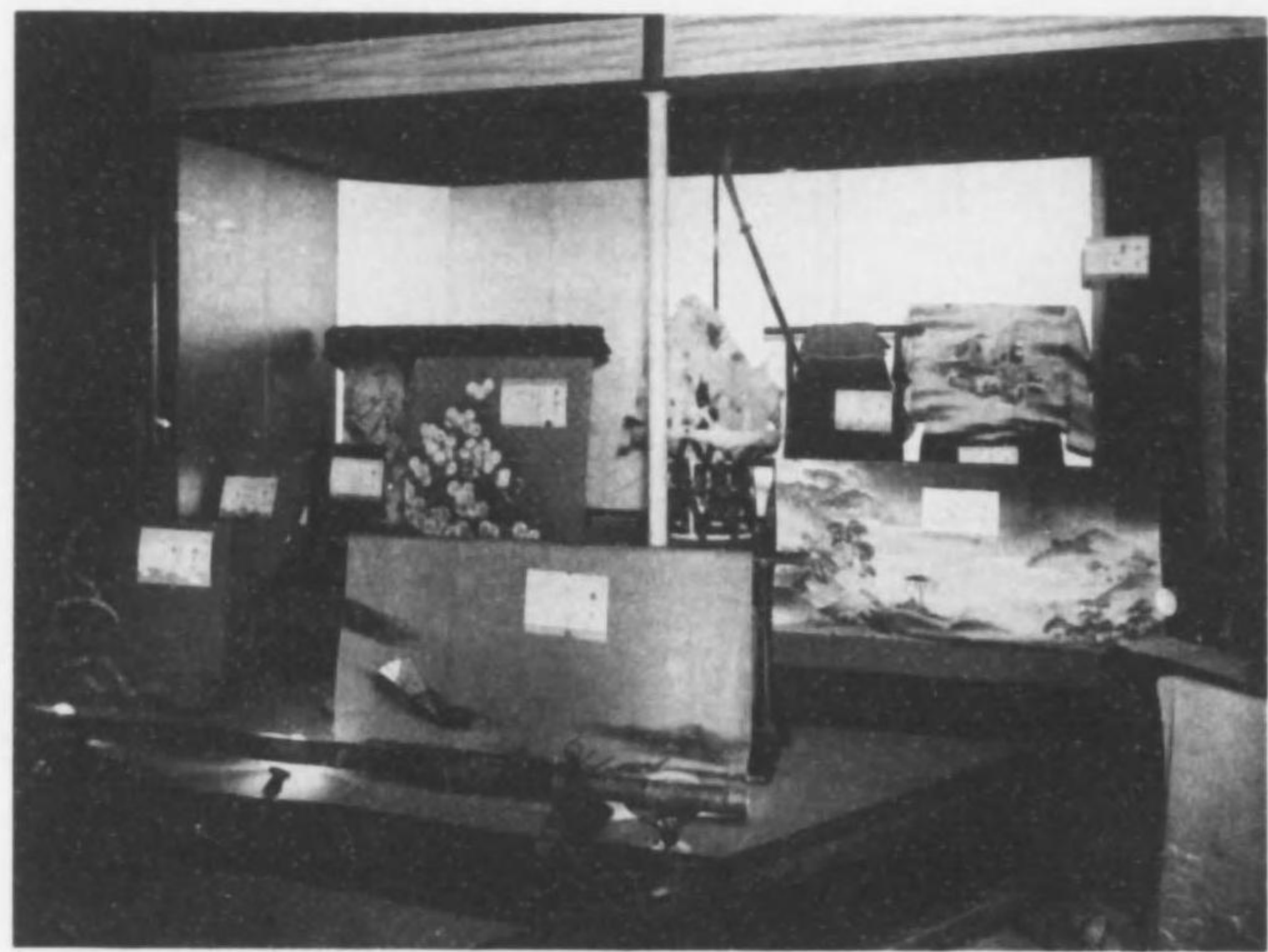
第一ノ列陣



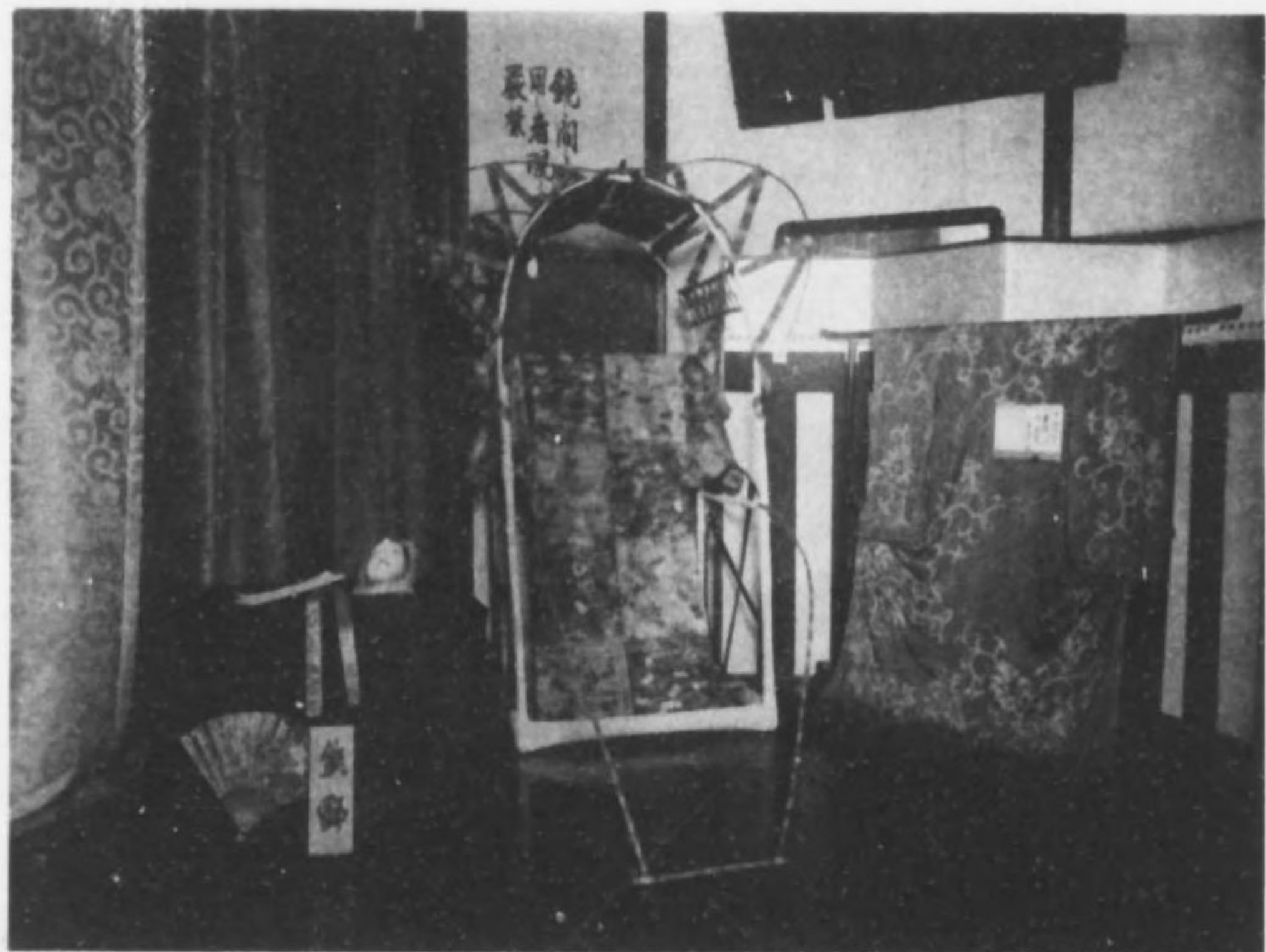
部一ノ列陳場會



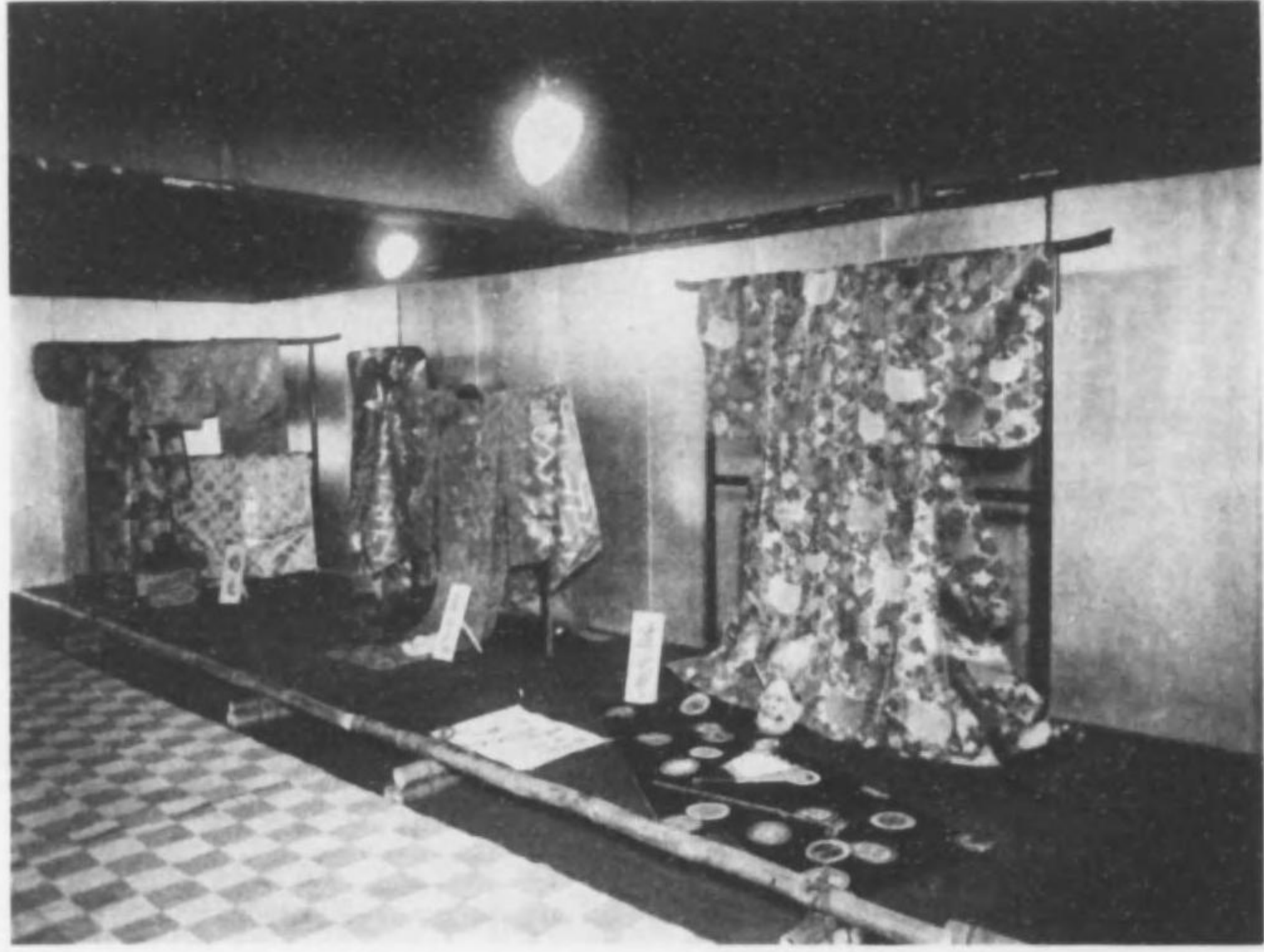
部一ノ列陳場會



第一ノ列陣場會



第一ノ品考參



第一ノ品考参



第一ノ品考参



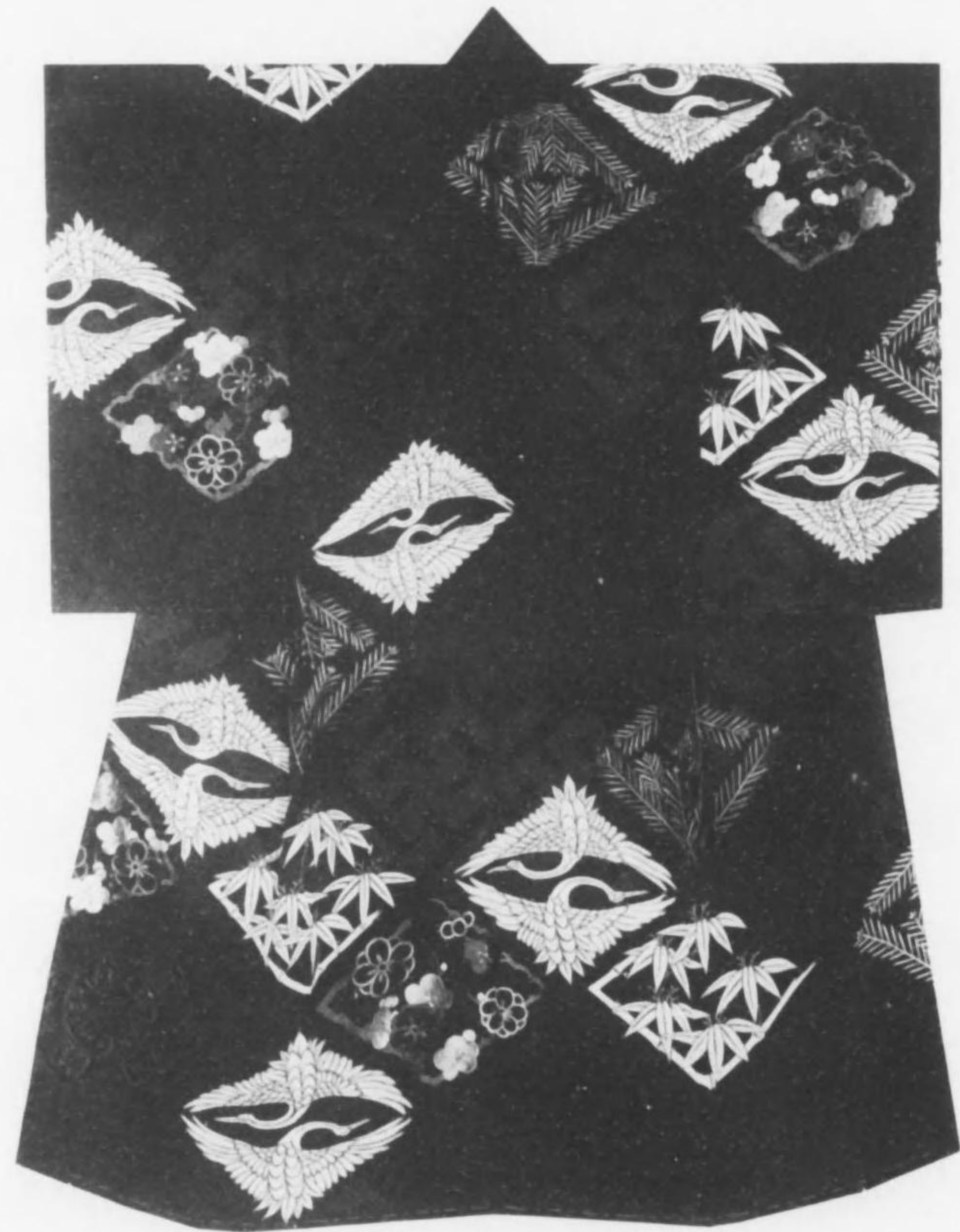
豊
鎮
龜

庭の砂は金銀の玉をつらねて
敷砂の五百重のにしきや
増嶋の楓原
の行折馬場の橋池の汀の鶴龜は蓬萊山もよそならず君の恵そ有難き



貳
老
松

梅の花笠春もきて織ふてふ鳥の相かな
松の葉色も時めきてとかへり深き相かな



◎

神

歌

三千

香

三歲

介

意



四
吳
盟
く
れ
は
と
り
綾
の
衣
の
浦
里
に



五
夕
顔

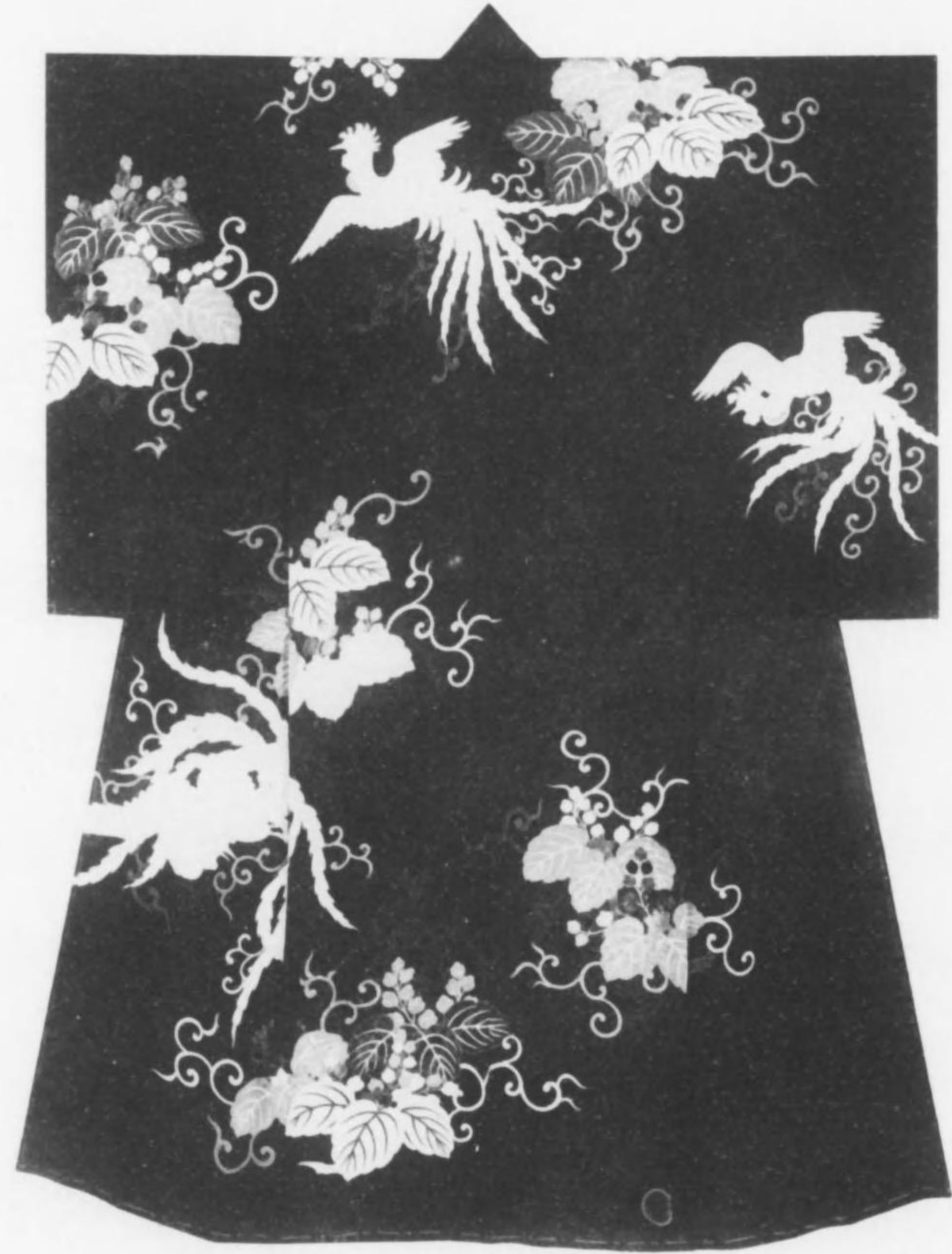
雲の林の夕日影うつらふ方は秋草の花葉の野を分けて



六

養
老

老を養ふ
瀬川の水
々々を
流むらん

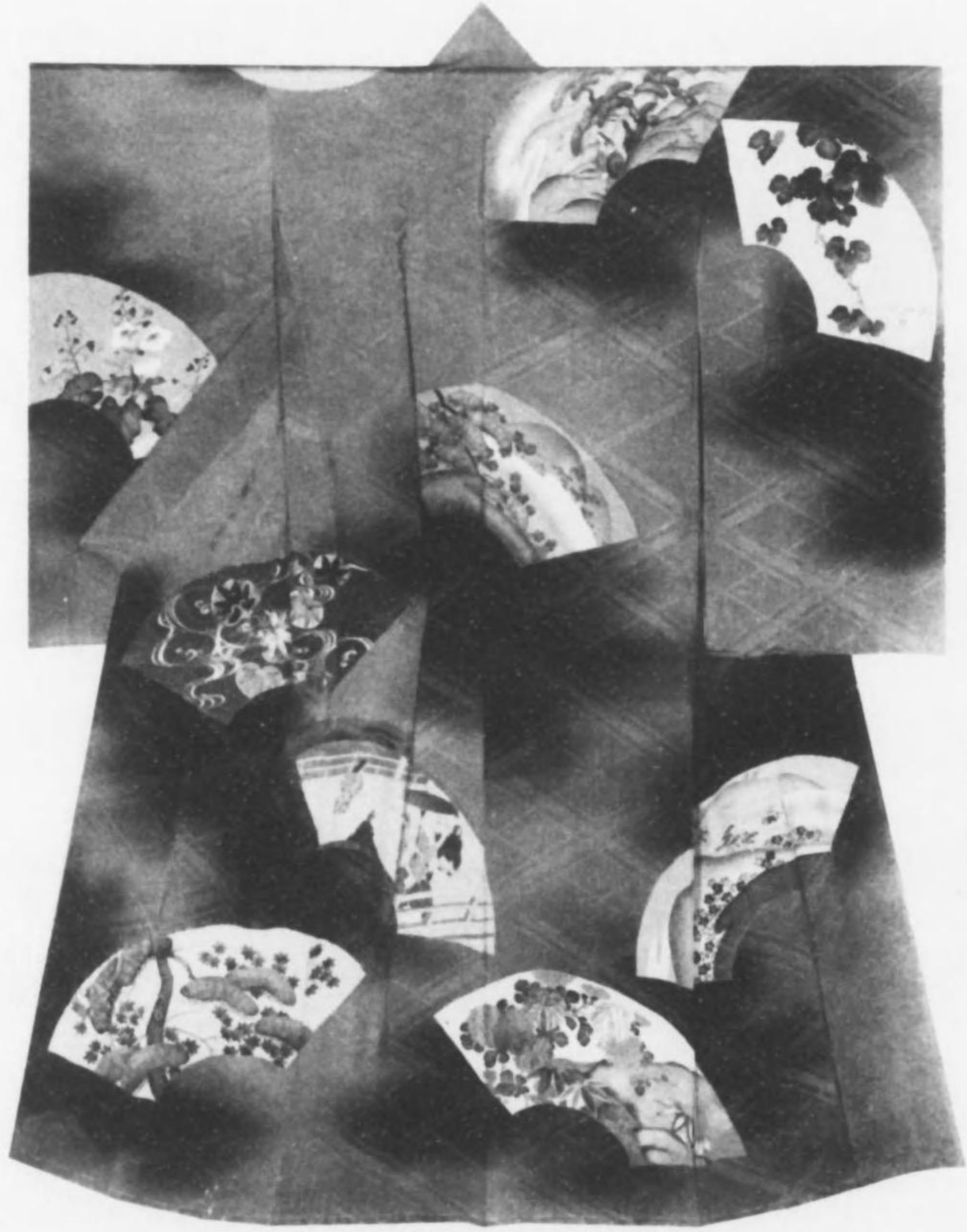


七

緋

紋

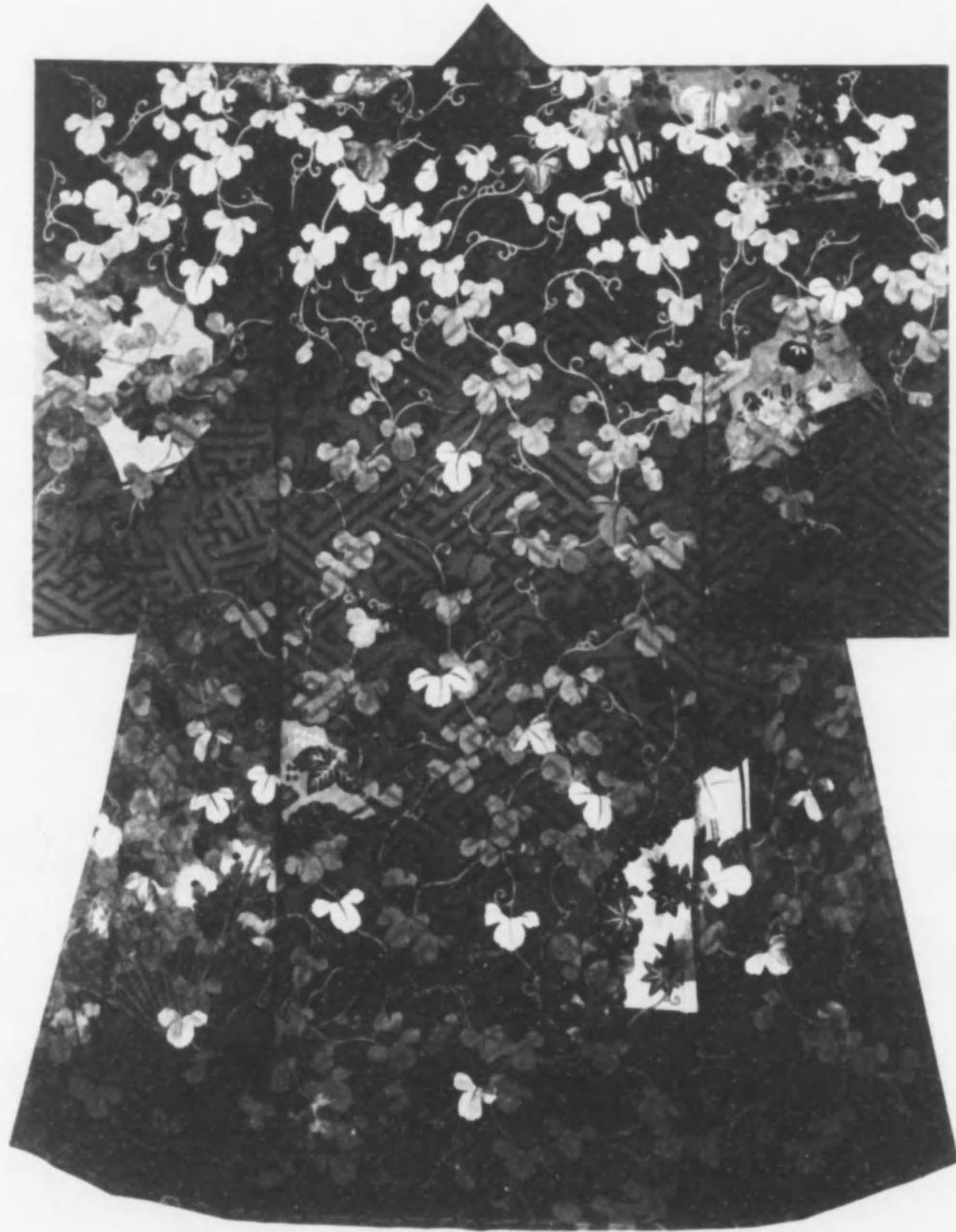
一尋の風管は秋巻の雲を動かせば



八

住
吉
謡

今日おもひ立つ廣衣得き日影も白鳥の鳥羽の懸風秋の山す
くればいとよ都の月の面影へたつる山崎や關戸の宿も移り
來ぬ轉らぬもりの芥川情名の猿原分けすきて



九

娘

女

形見の扇そなたにも身にそへ持し此扇裏の内よりとりいたせ
は折ふし黄昏にはのく見れば夕顔の花を書きたる扇なり

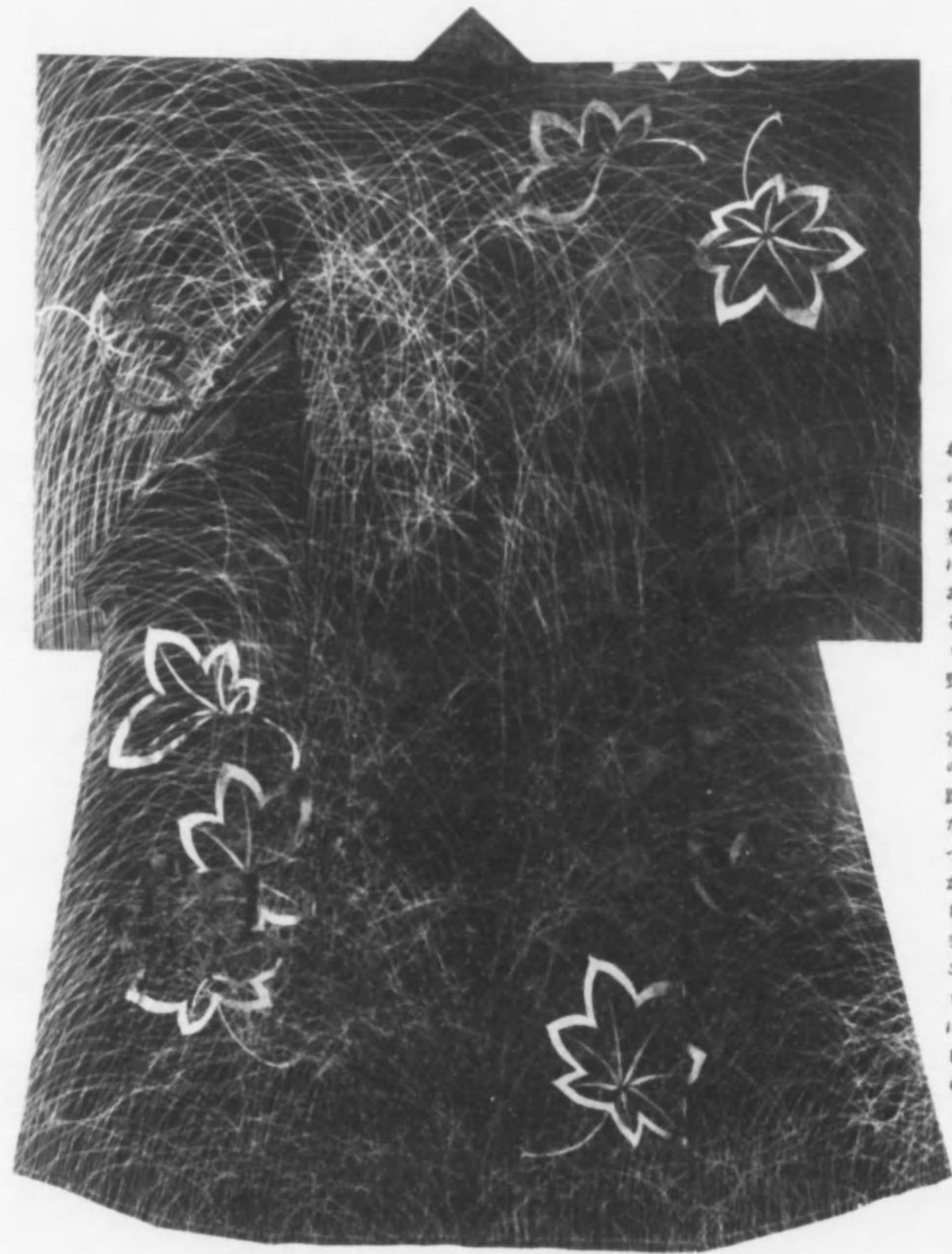


拾

松

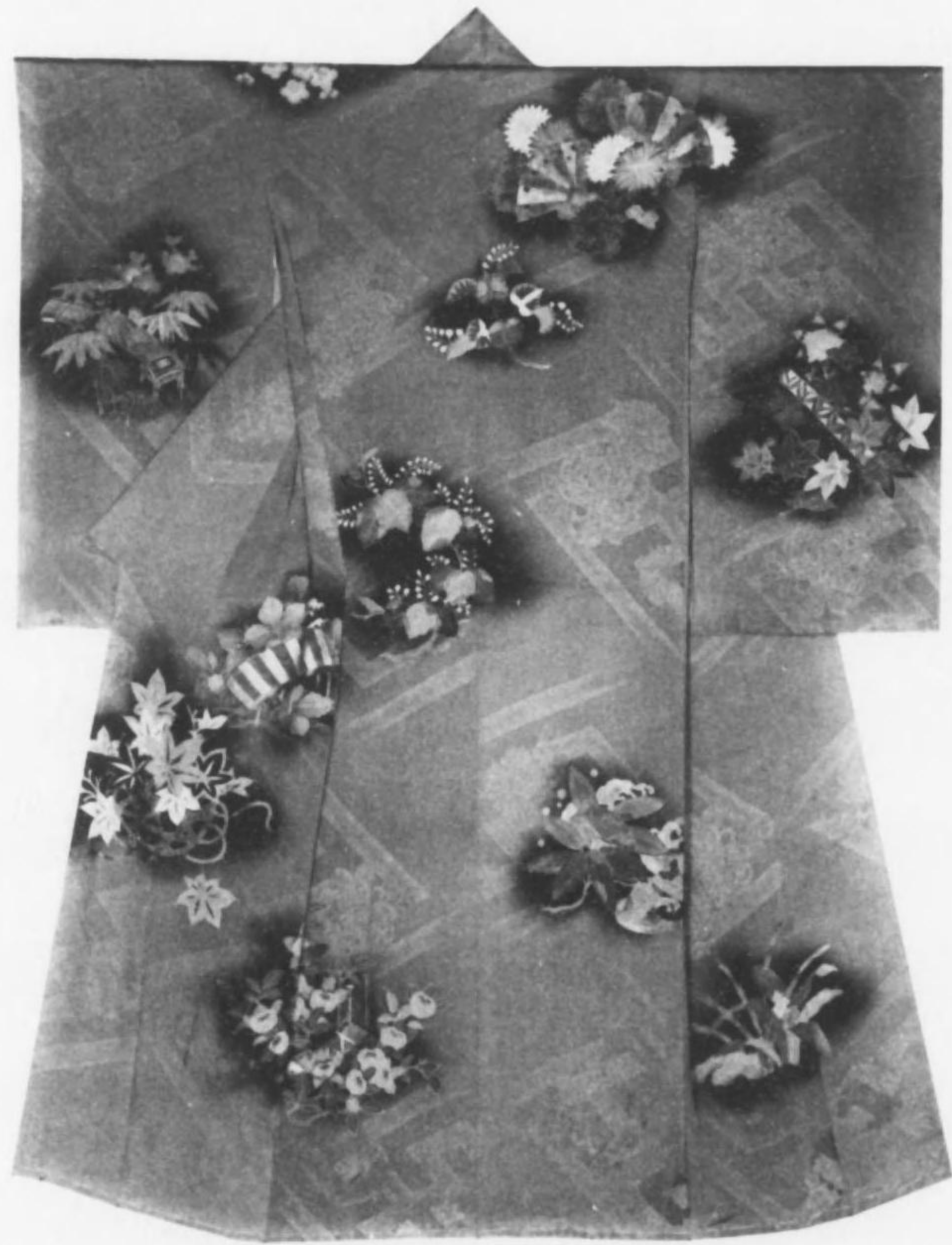
風

よせてはかへる片おなみ音邊の田鶴こそは立ちさわげ

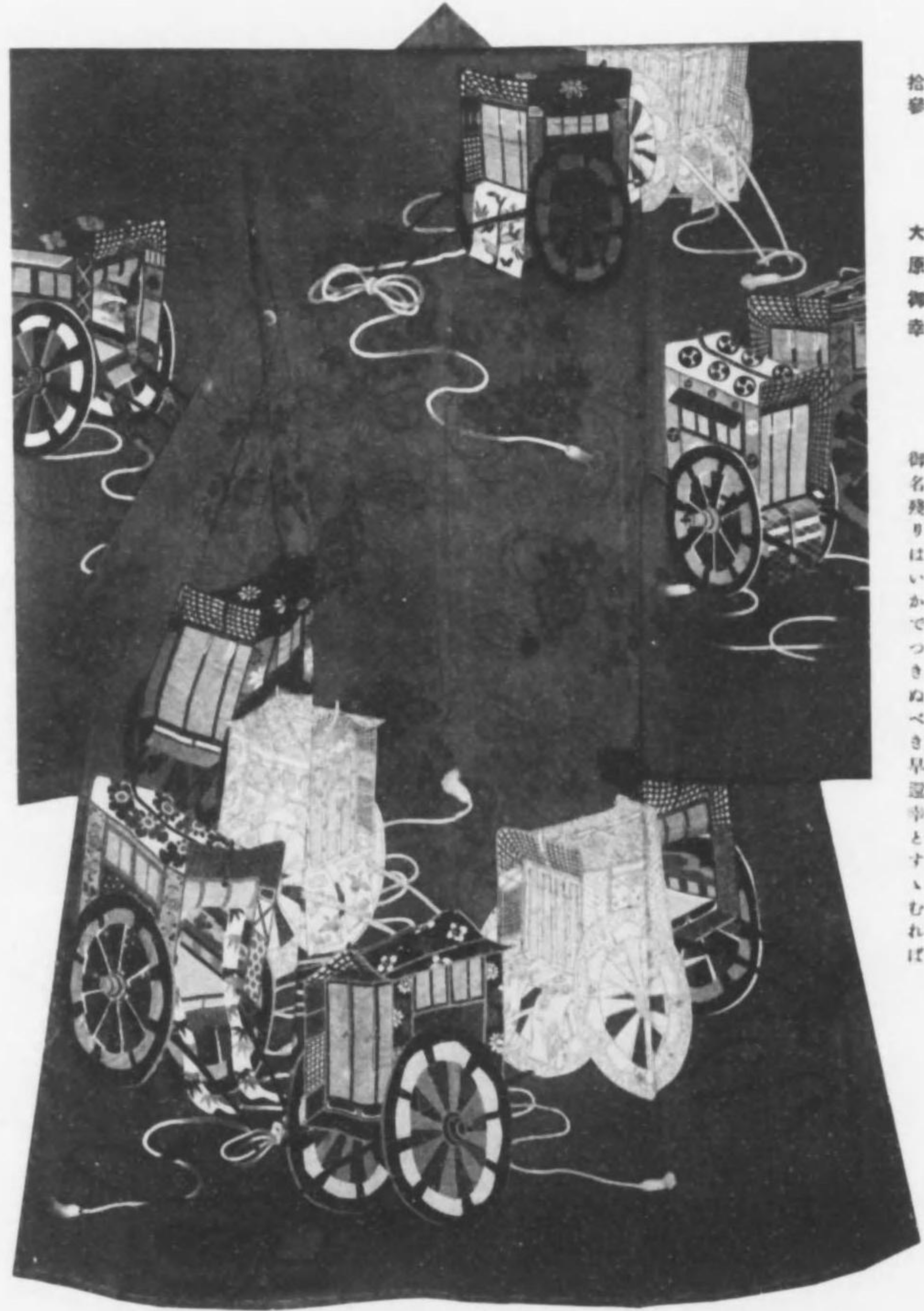


繪
野々宮

杜の下道秋暮れて紅葉か
つちり淺草か原もうら
れ草葉にあると野々宮の
跡なつかしきこゝにしも



拾貳
任
言
目衣文様より



拾夢

大原御幸

御名残りはいかでつきぬべき早瀬事とすゝむれば



繪
安
宅
子
方
判
官
の
意

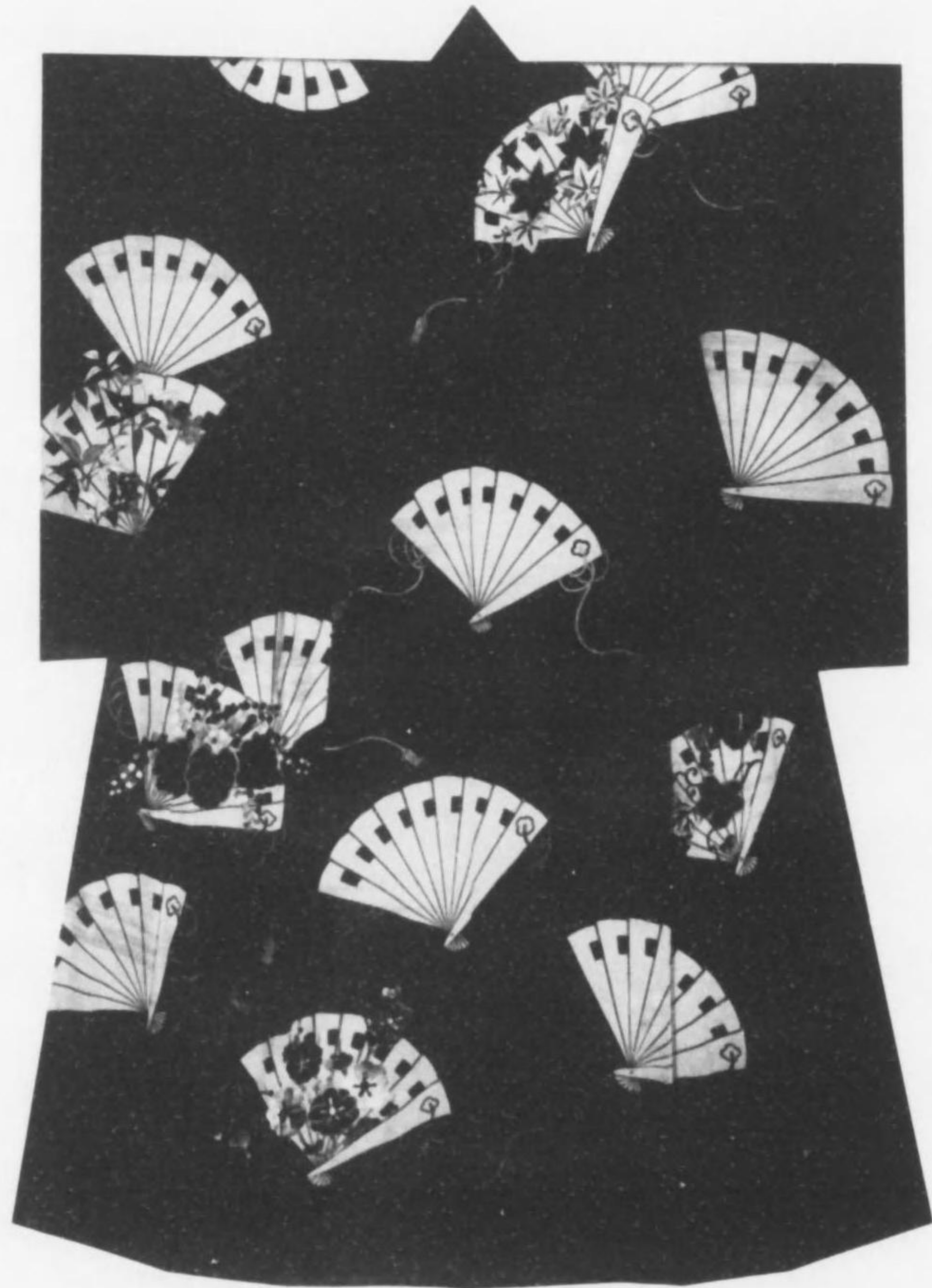


給五

老

松

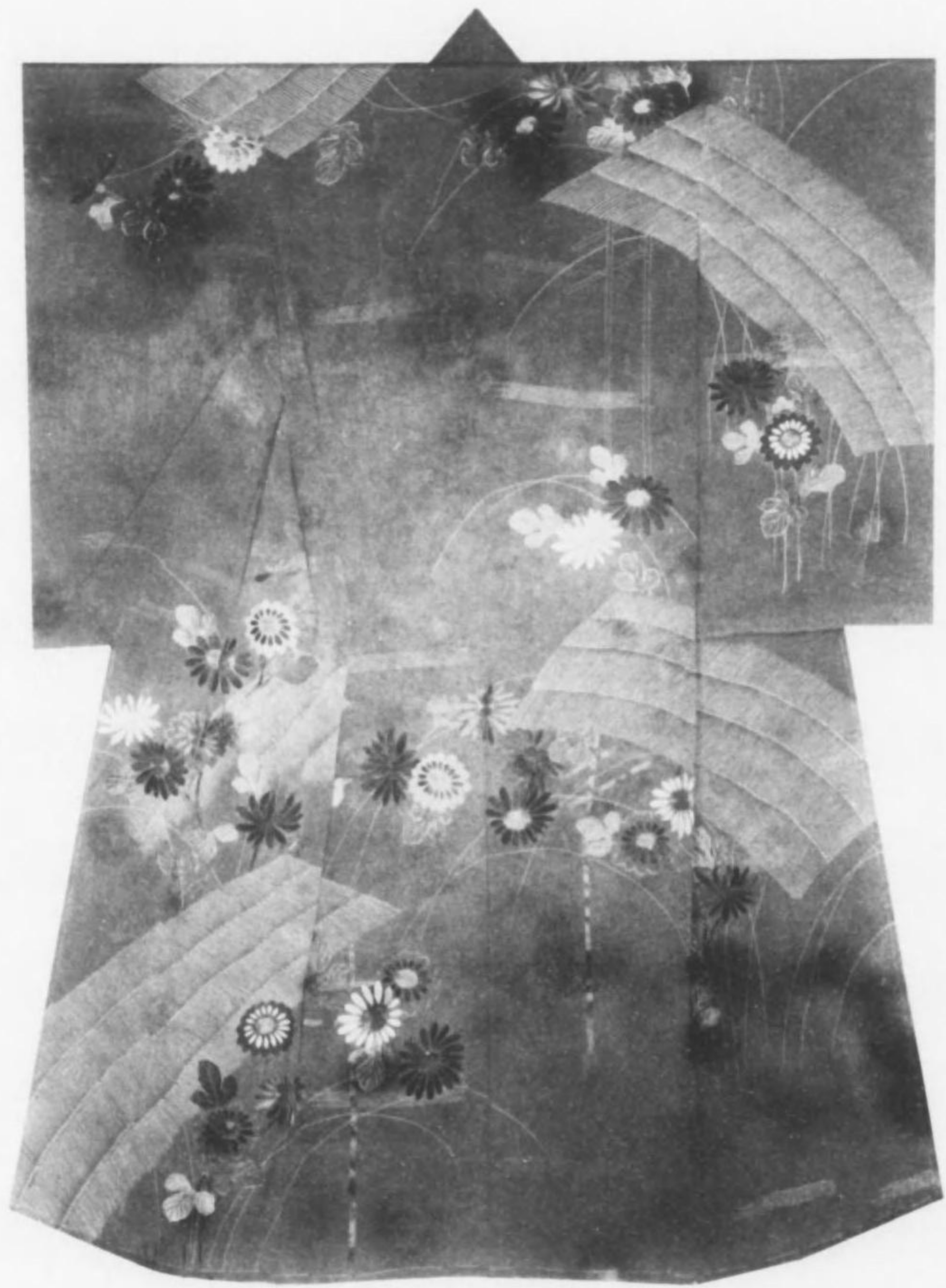
翠藍紅門の群ひ音を忘れず



拾六

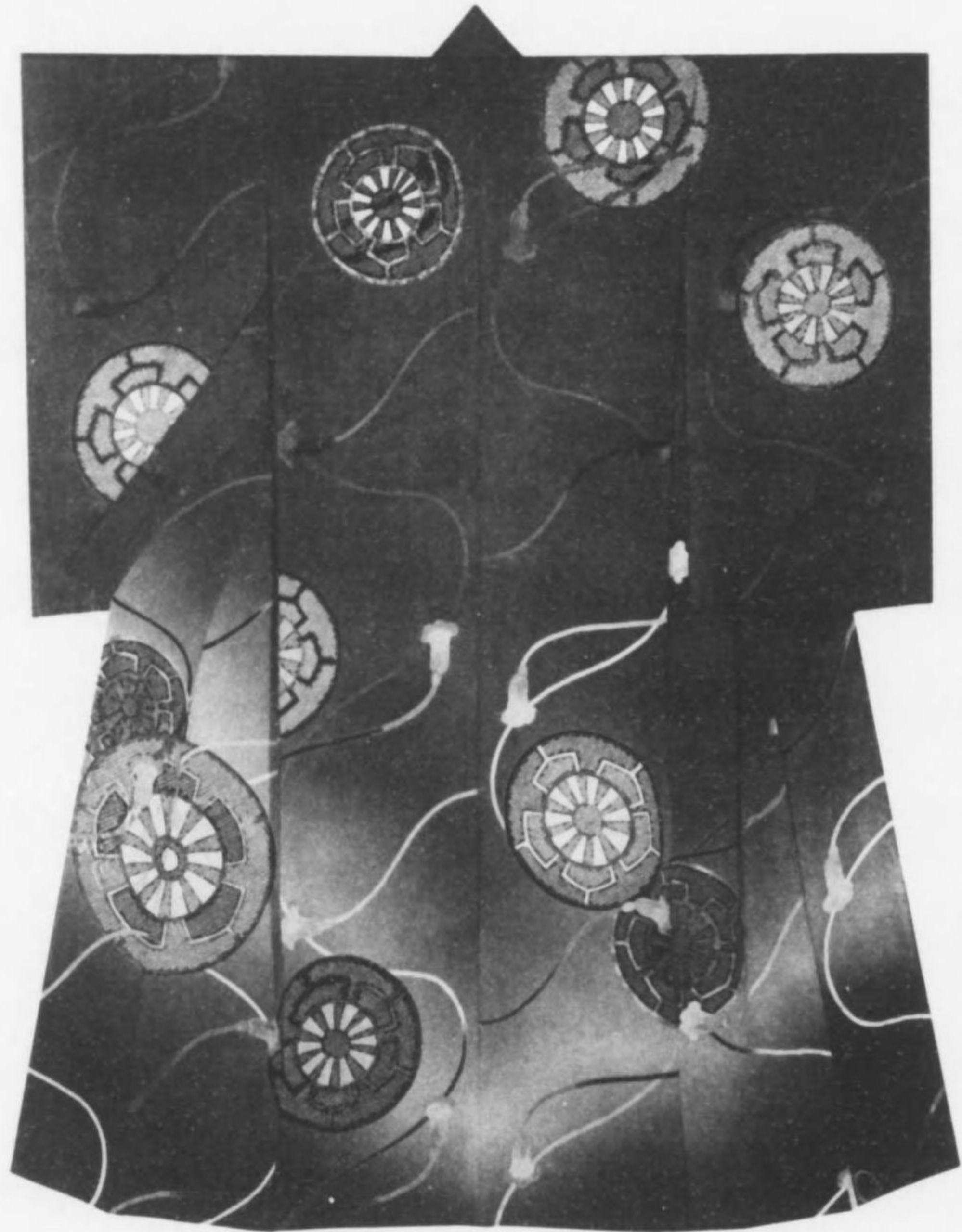
二人静

静は舞の上手なれはとくくありしかば



繪七
校
虫

早夕影も深みとり草の花色露ふかき



拾八

葵

上

吉女房とおぼしき人の午もなき車の轆にとりつき



繪九

期

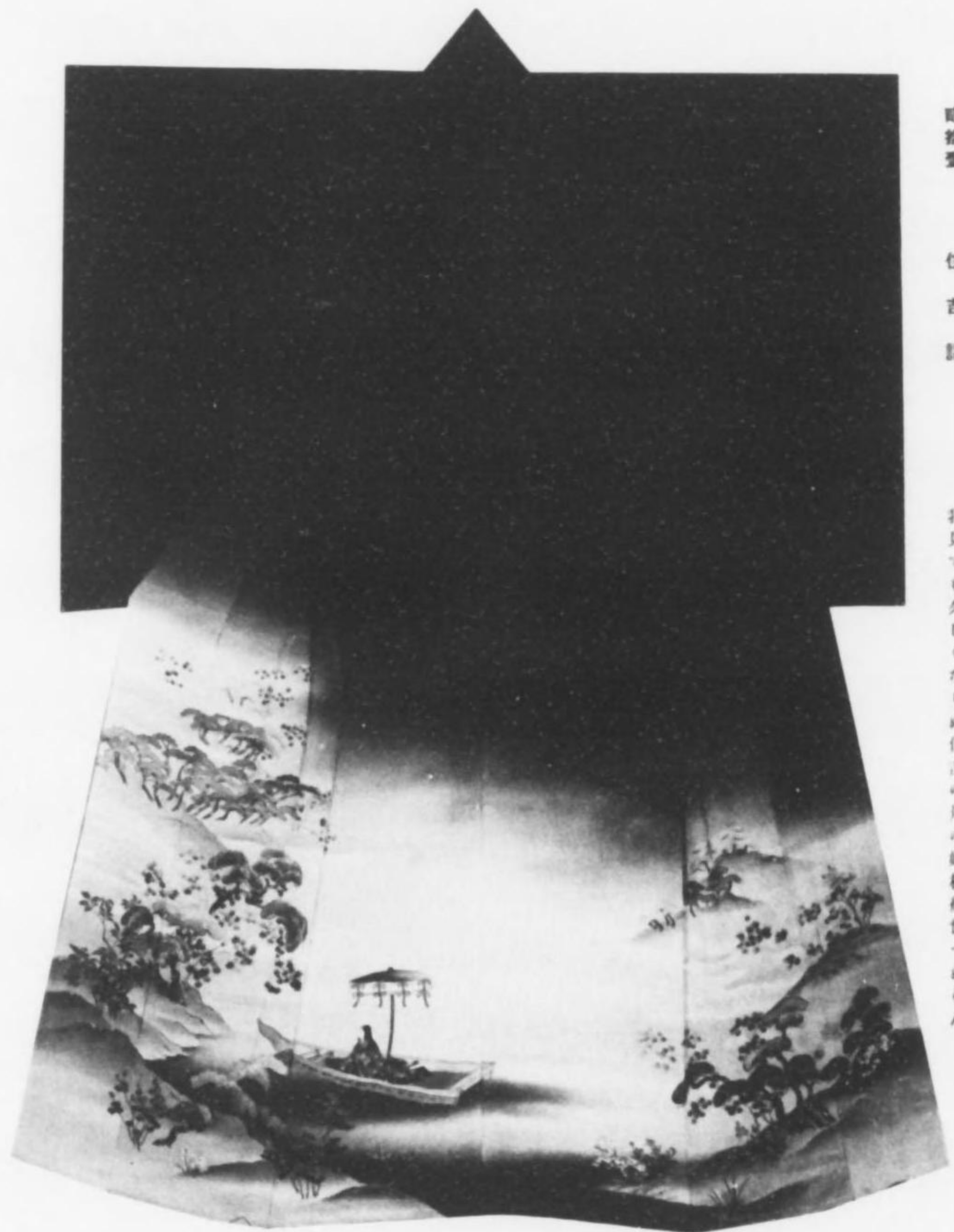
女

なにともしや白露の草の野上の旅寫せし契の袂はいかならん



紙
江
口

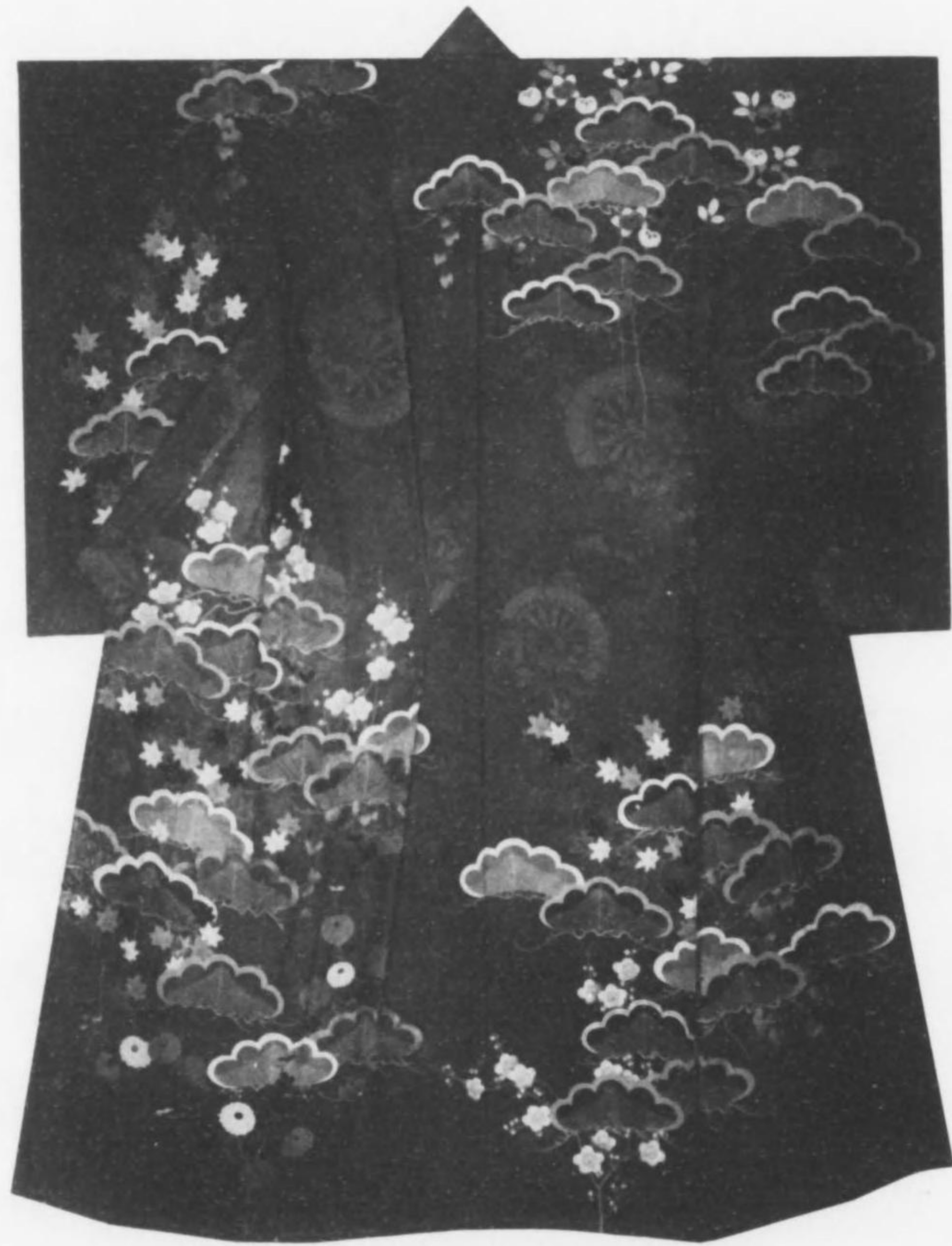
紅花の春の御紅梅の山吹ひをなすと見し夕の風に誘はれ紅雲の秋の夕
雨の林を合むといへとも朝の雲にうつらふ松風羅月に言機をかむす者等も
去つて来ることなし翠雲紅間に枕をならへし桂香もいつの間にかは隔つらん



貳拾壹

住吉詣

我見ても久しくなりぬ住吉の岸の船松渡世へぬらん

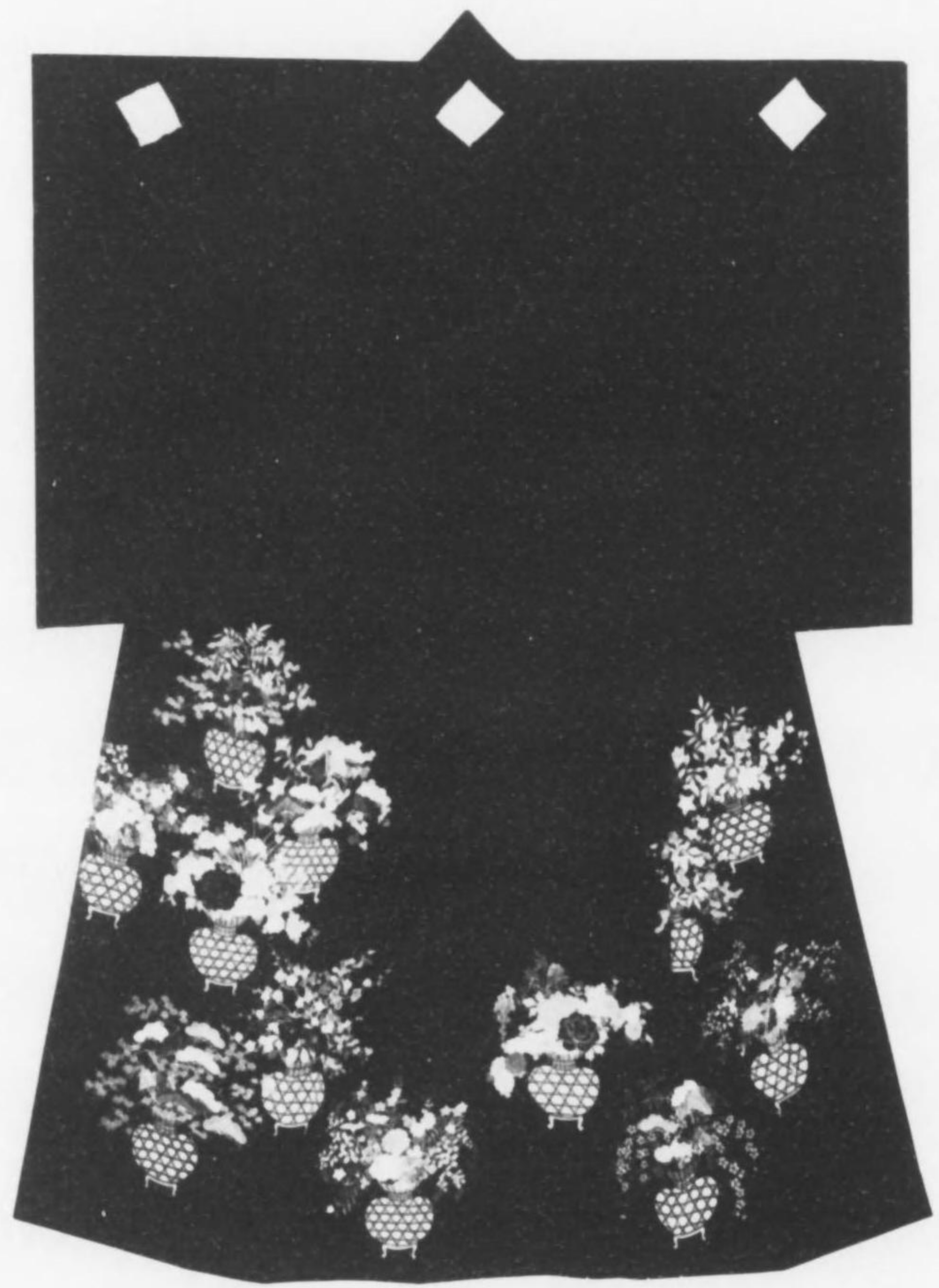


威
徳
威

郎

郎

四季折々は月の前にて春夏秋冬萬木千草も一日に花咲けり

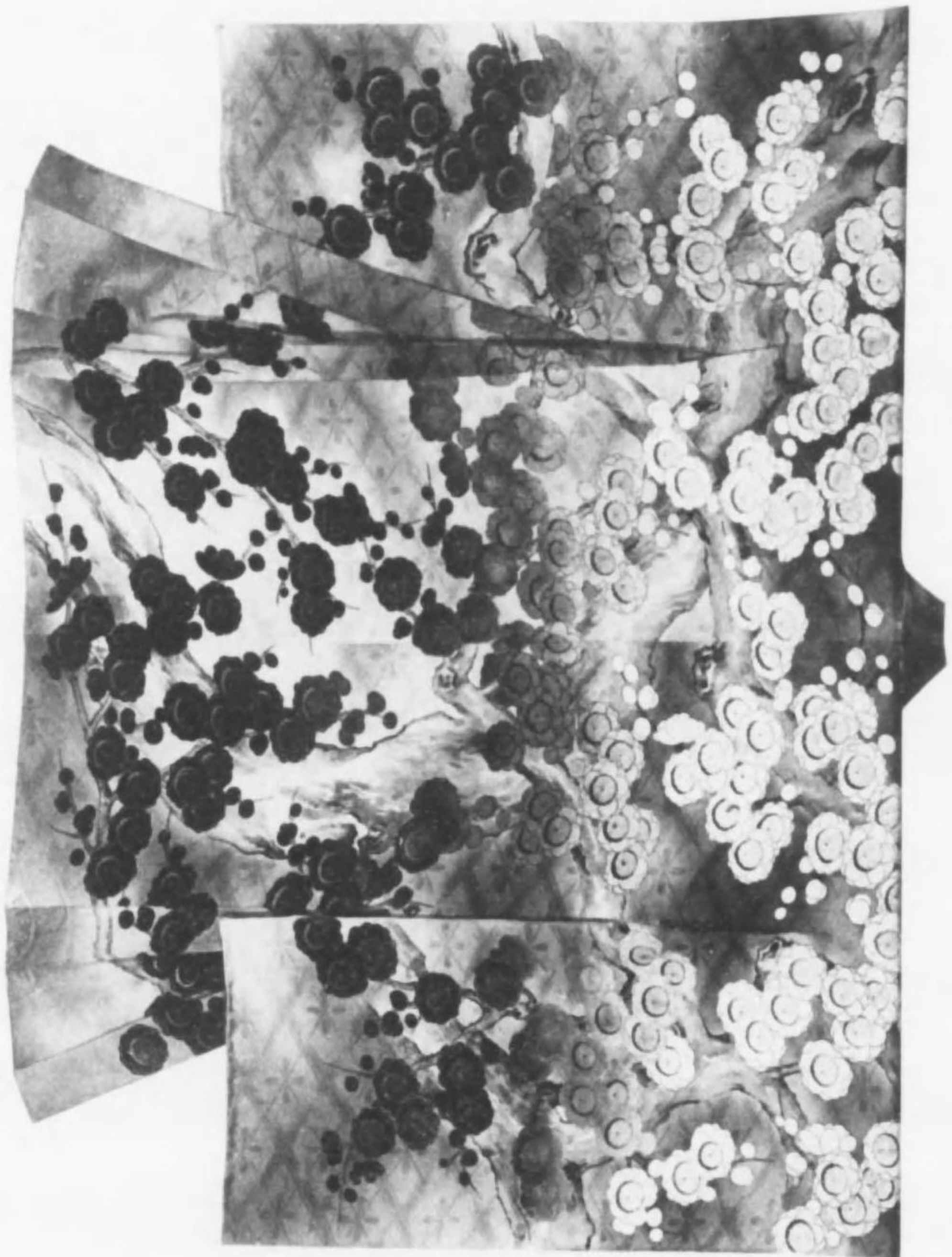


貳拾肆
半
襟
小書に依る立半供養



蕨類 四
種 掛り
一、二、三、四

Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side of the paper.



花菱文の帯に花子
圖



貳拾六

鶴
亀

ワキ 大原の狩衣文様



貳拾七

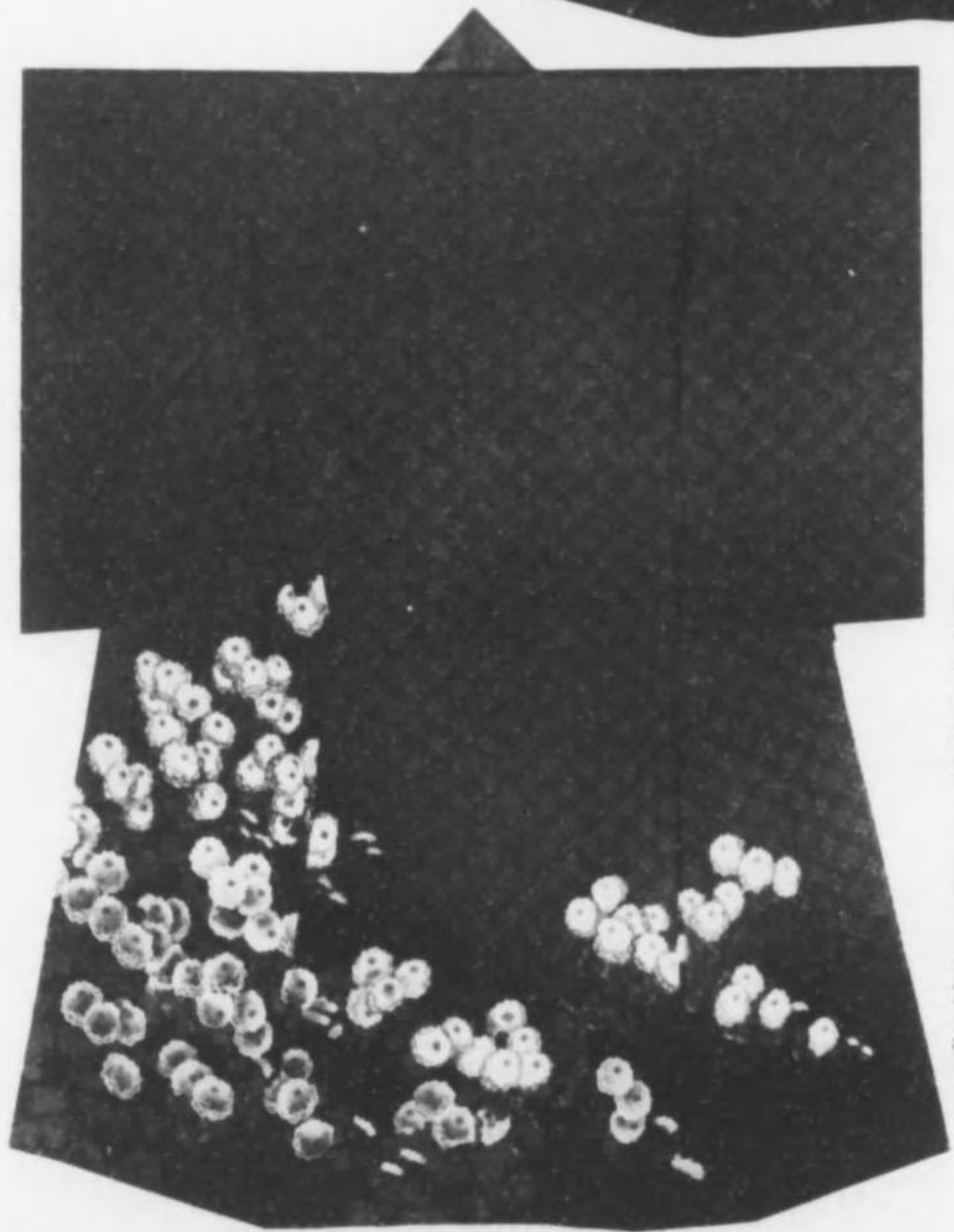
大原
御幸

こゝのえの花の名種りをつつねてや
吉葉をしたふ山路かな



貳拾八

數世宗家御秘藏の袴衣文様より

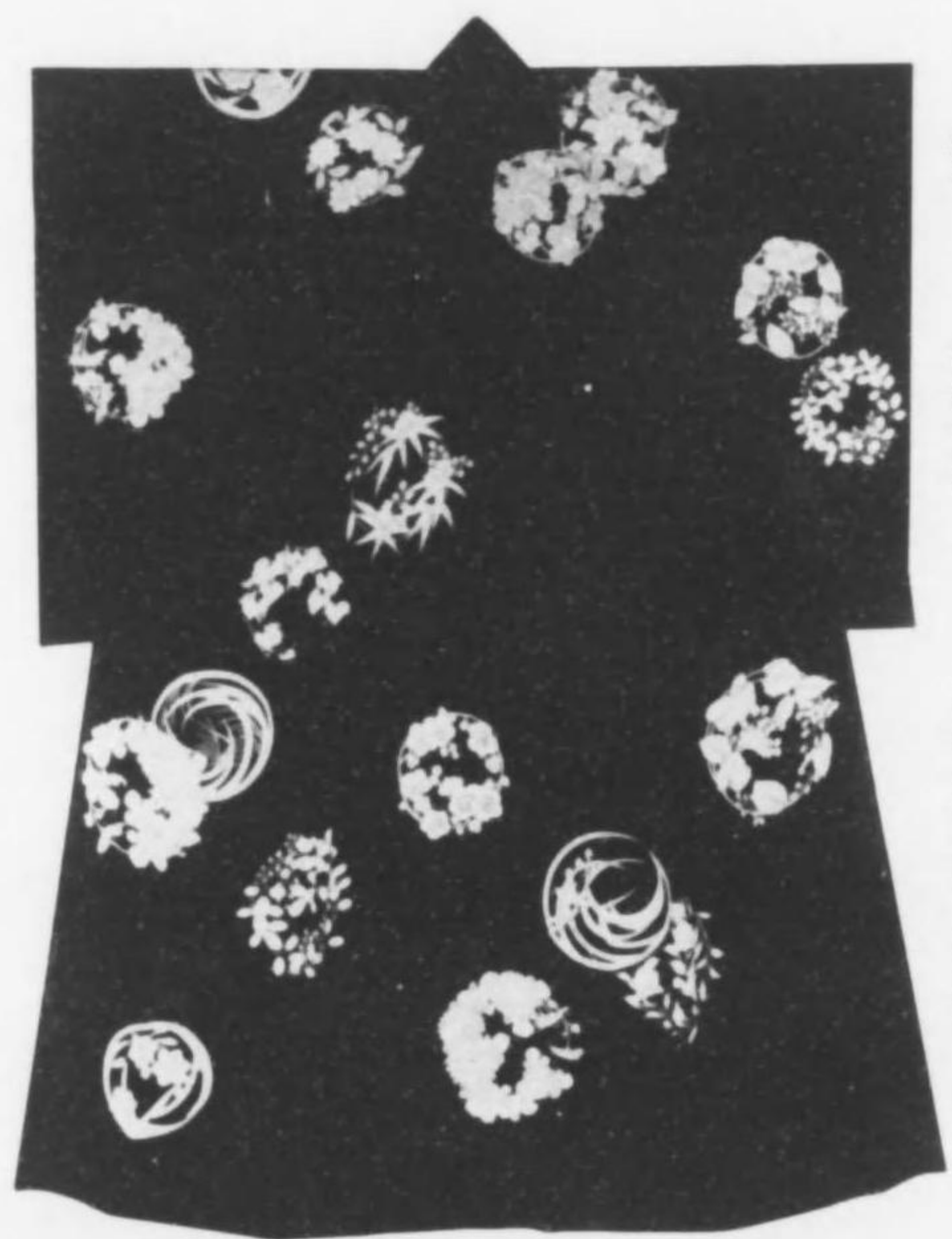


貳拾九

繪の重荷

本曲のシテ

山科の莊司は菊作りなりしよりこの意を採る



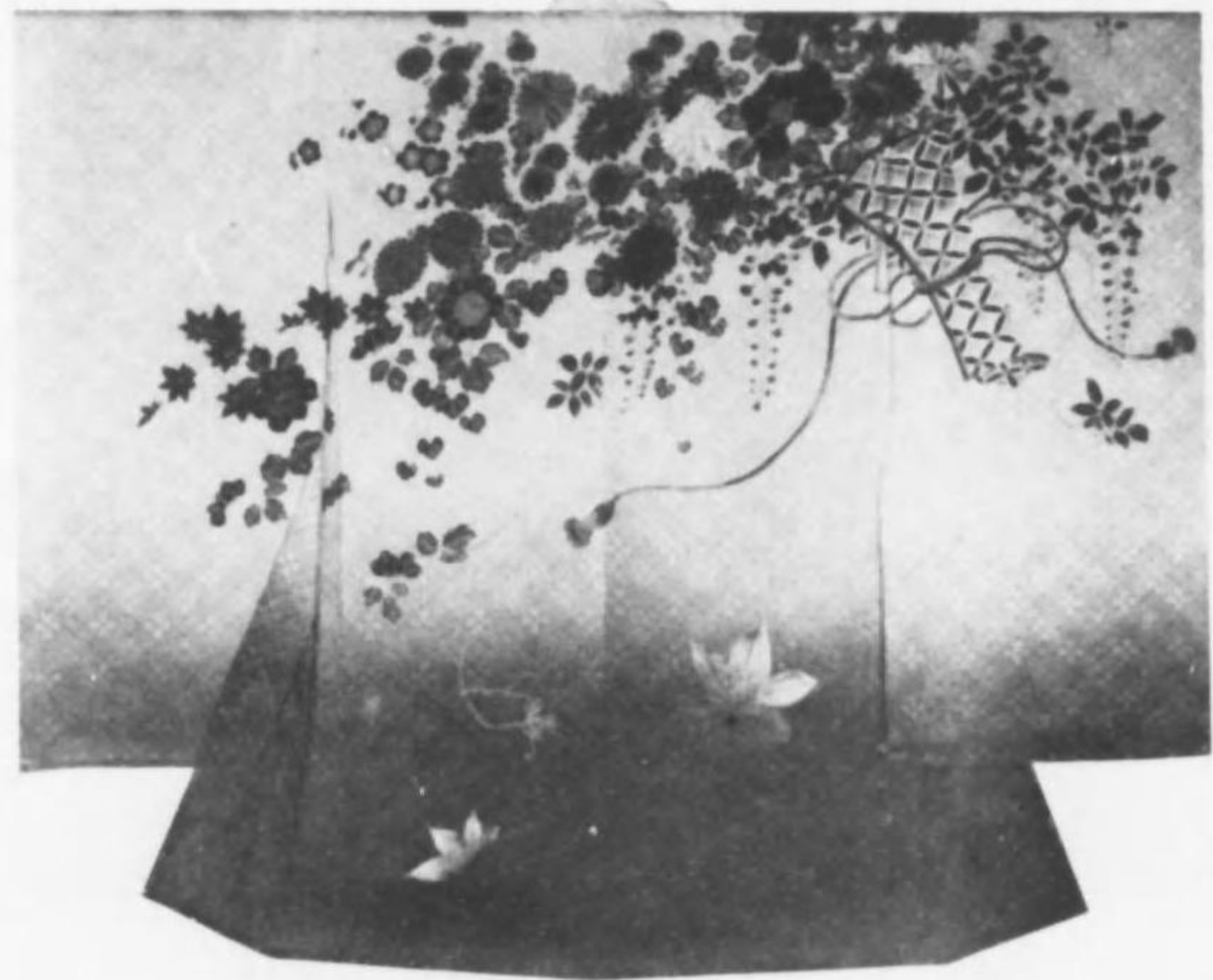
紗袴
高野物語

まごわかし花のゆくえをたづねつゝ



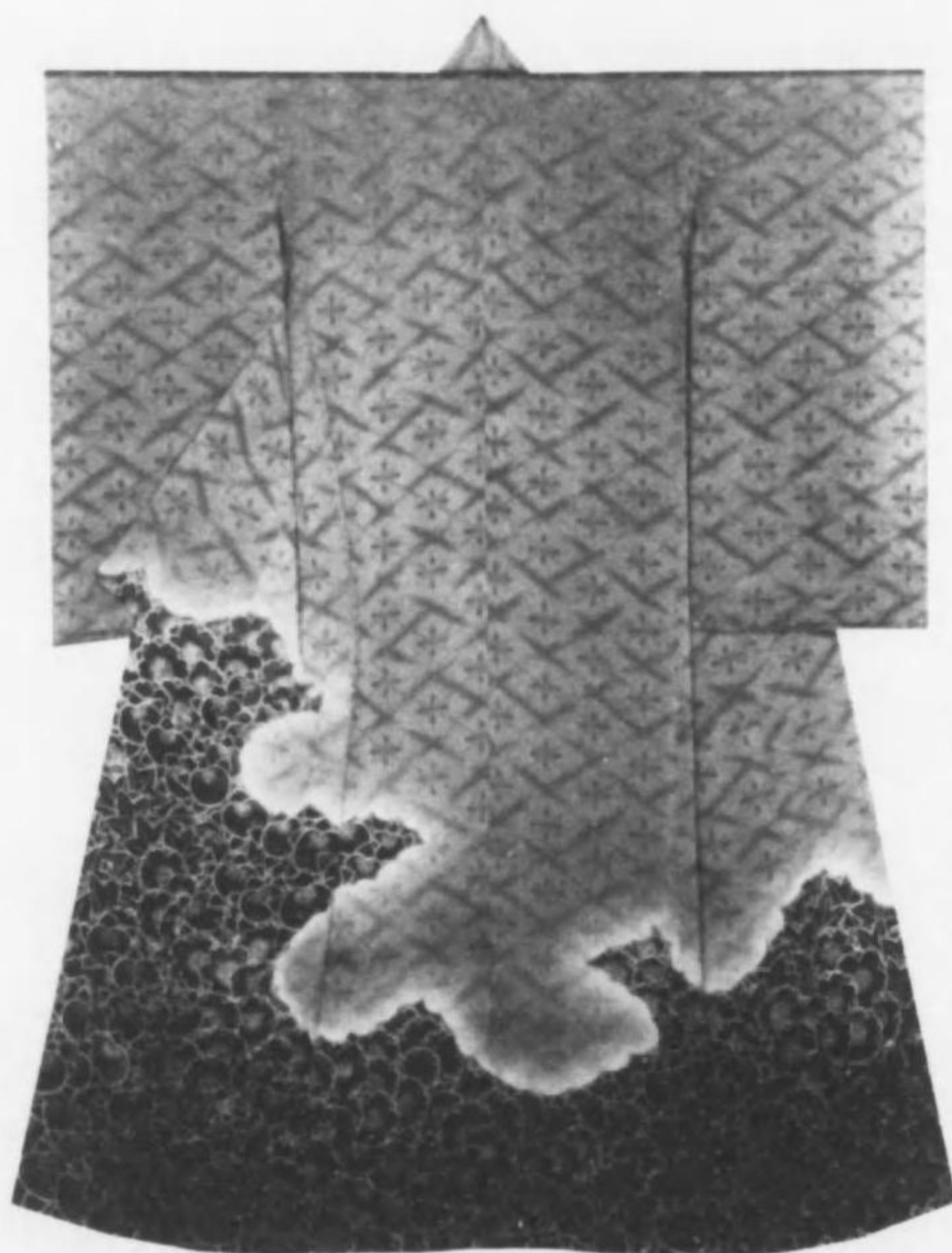
紗袴
幸塔恋小町

鳥羽の戀塚秋の山月の桂の海舟舟こきゆく人は誰やらむ



夢拾夢
山

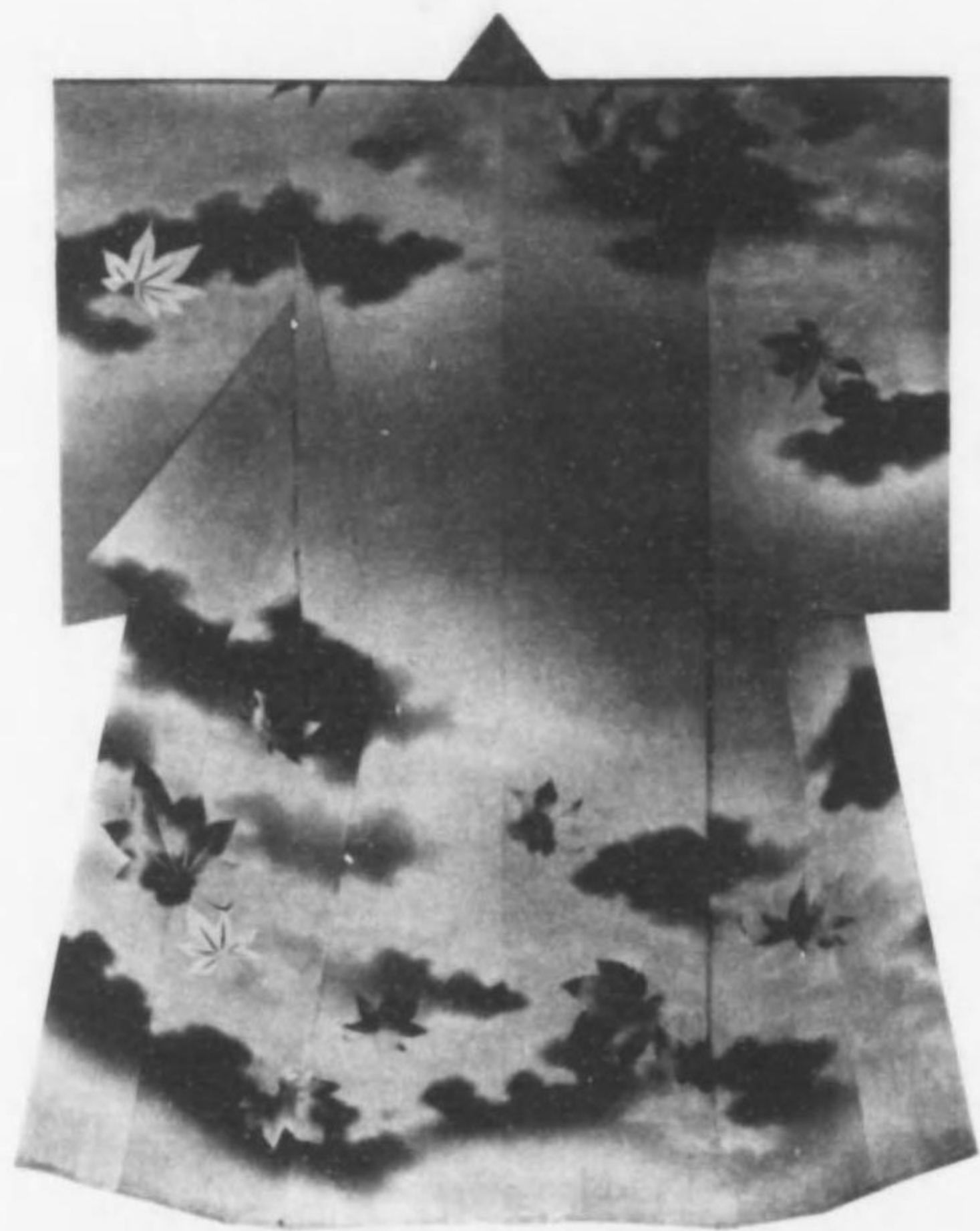
いろ／＼なれど紅はいつれ深百合
ふかみ草御心よせにめされ候へ



夢拾夢

放生川

さて百敷の舞には大宮人のか
さすなる柳立花もろともに



参拾四 土 物

うき立つ雲の行脚をや

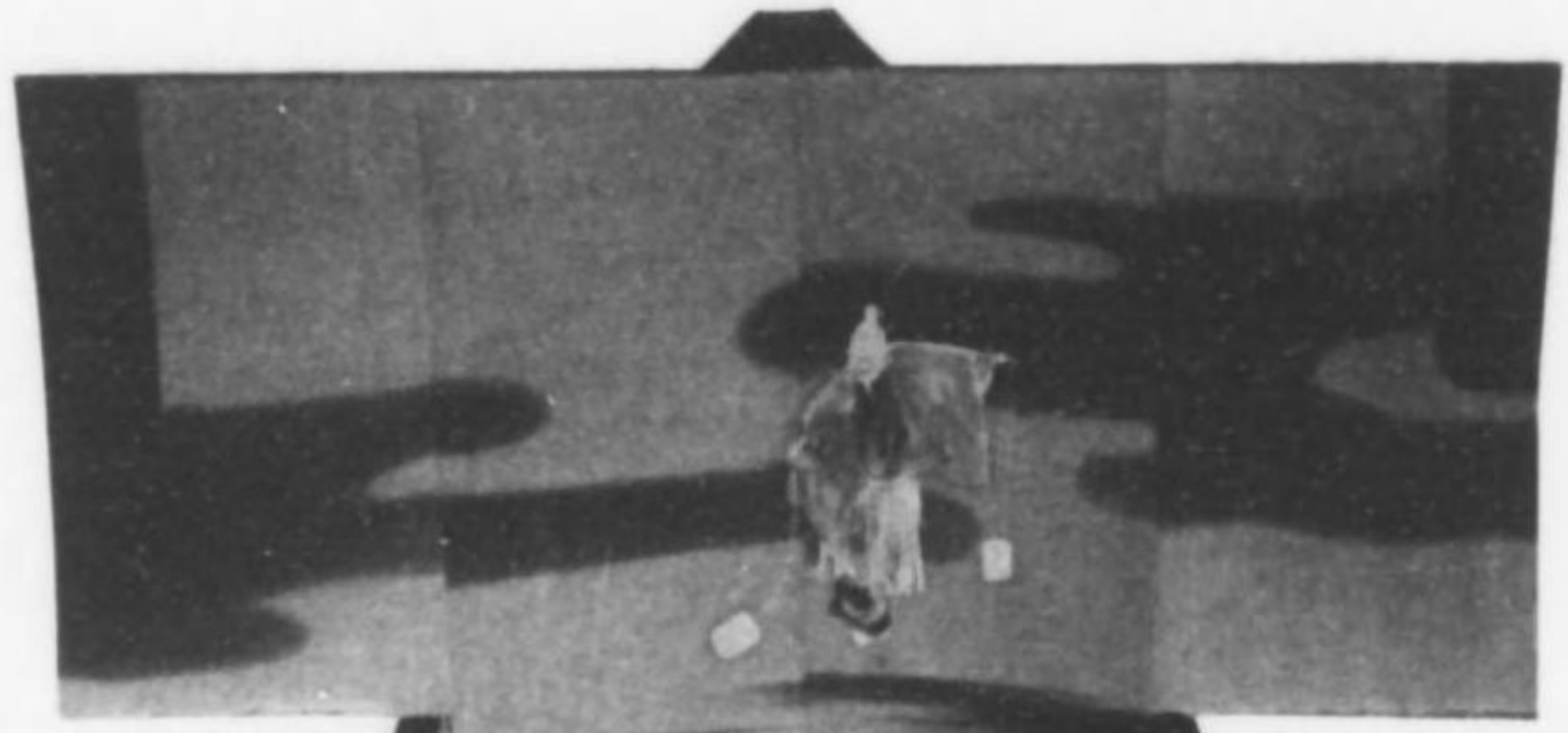


参拾五

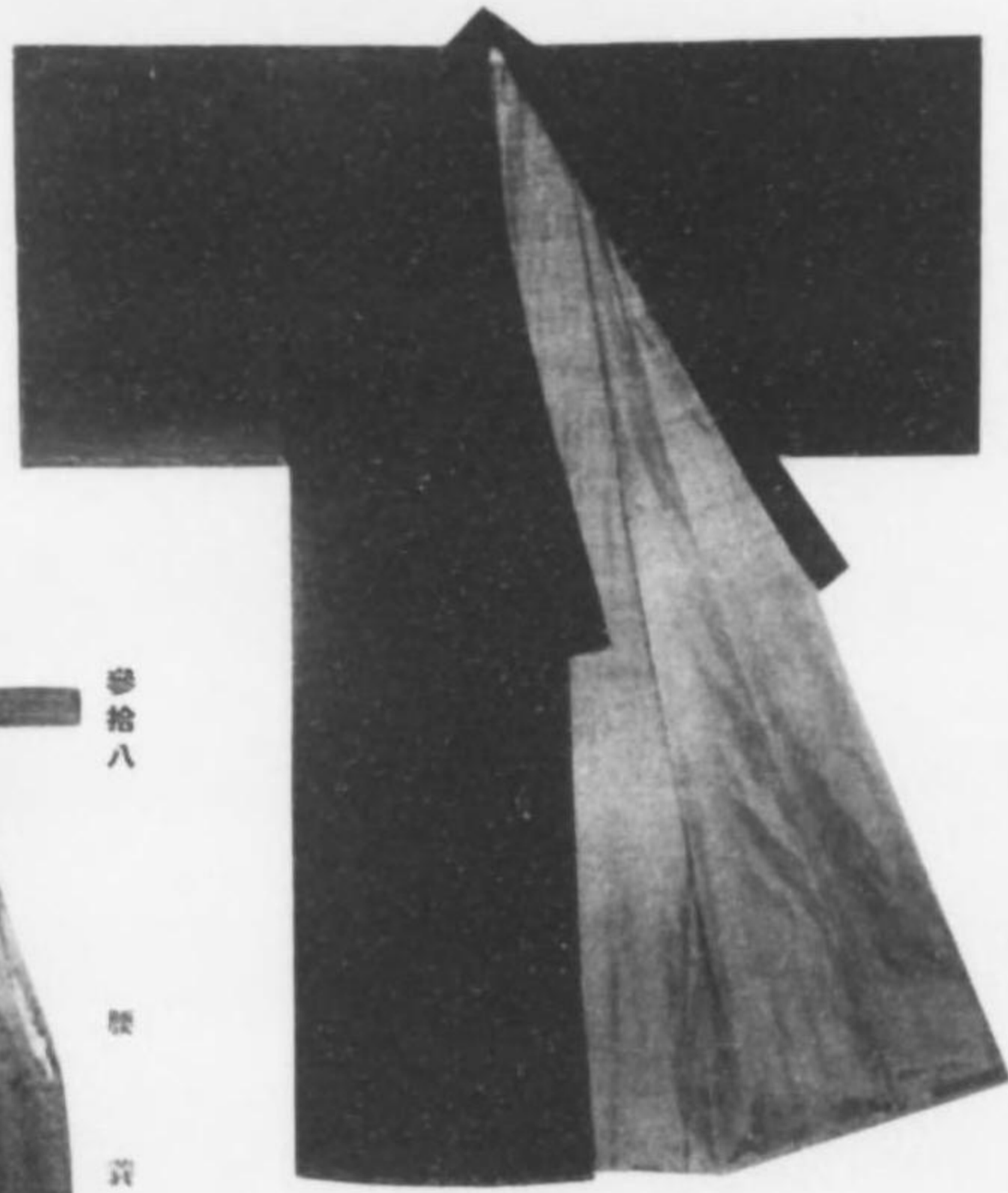
六

浦

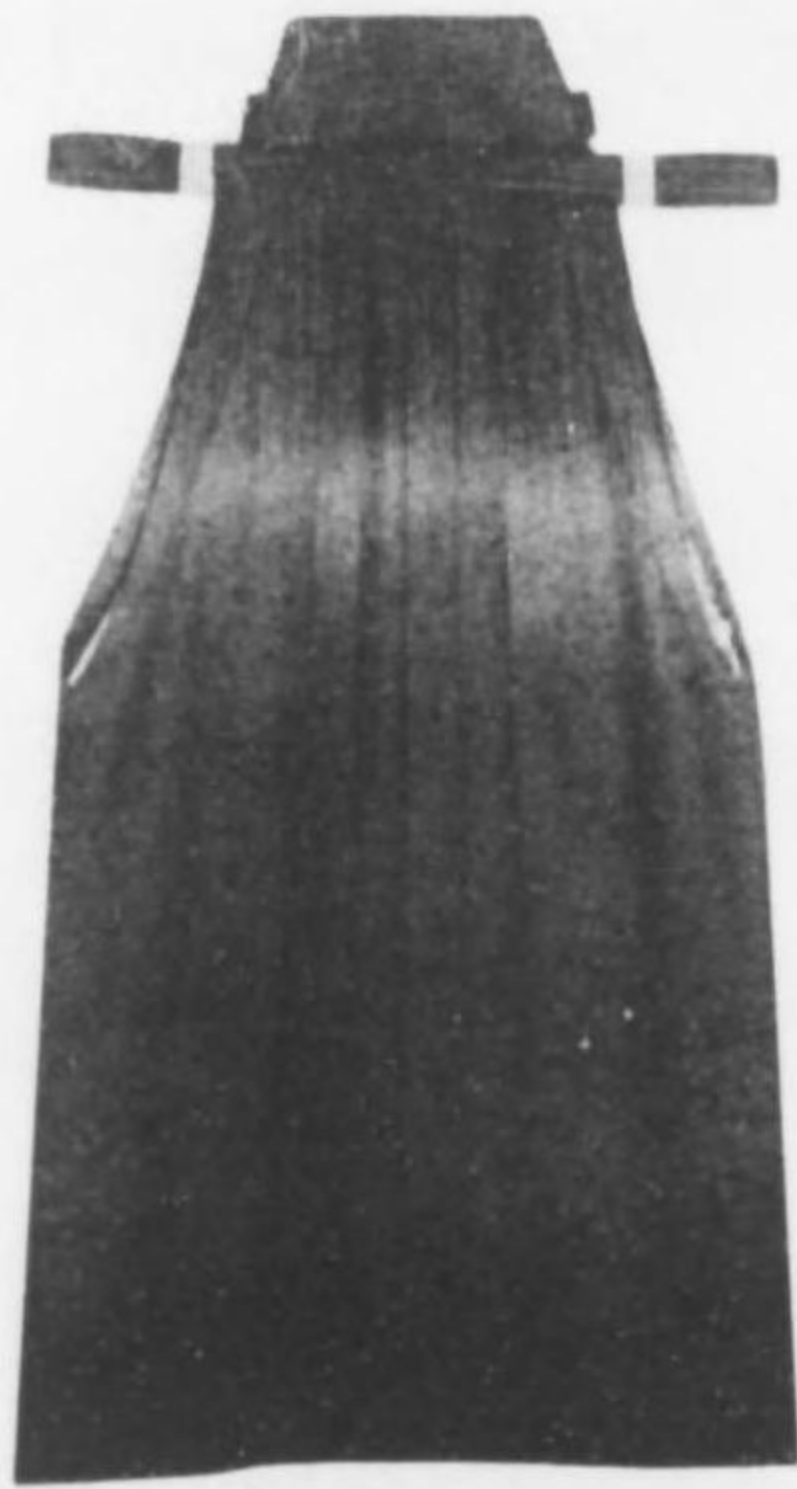
それ四季折々の草木おのれくの時を得て花葉さまくその姿を



參拾六
融



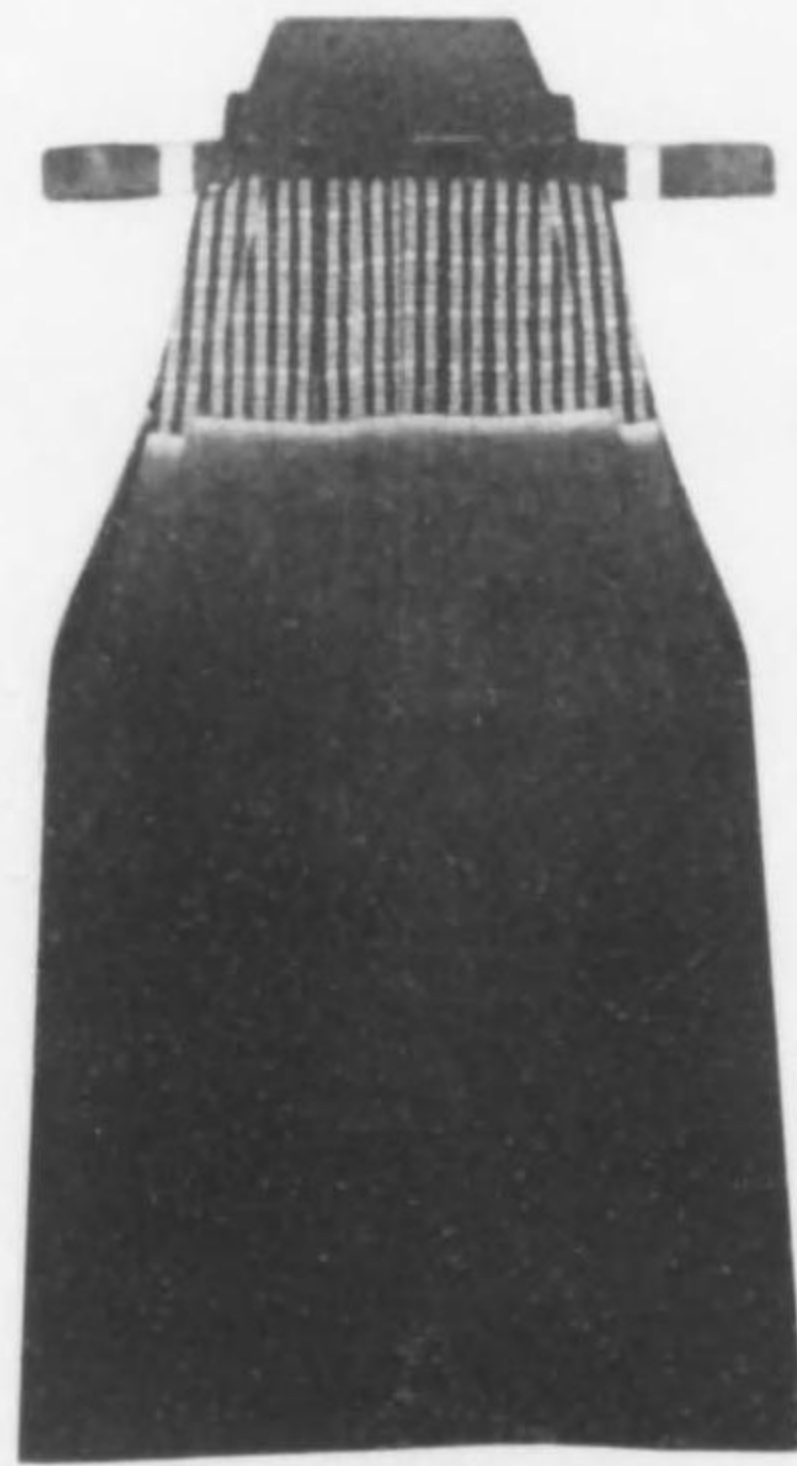
參拾七
小
衣



參拾八
襦
袴



藝拾九
鉢の木
岩かりの段



四拾壹
鉢の木
シテ 祝千日の意

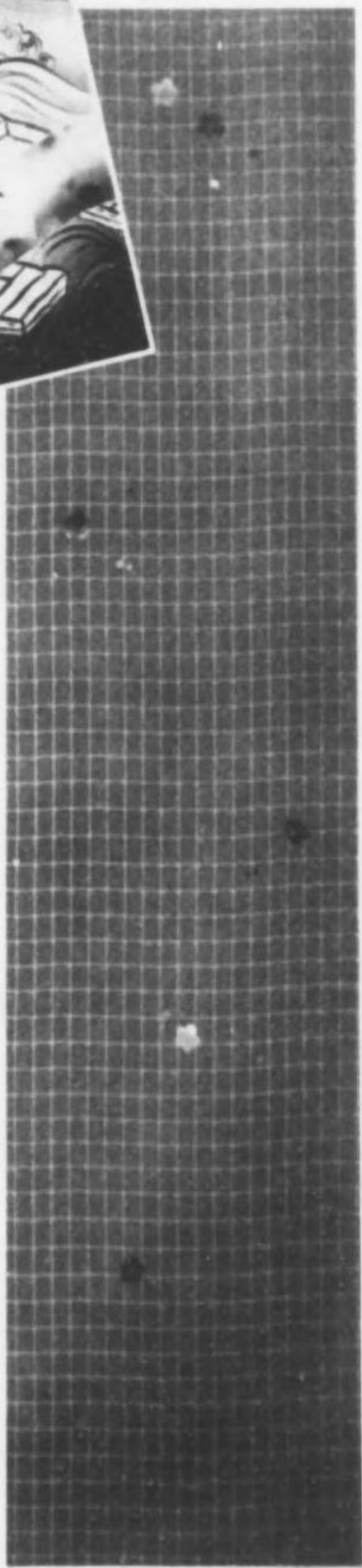


四拾
鉢の木
粟の段



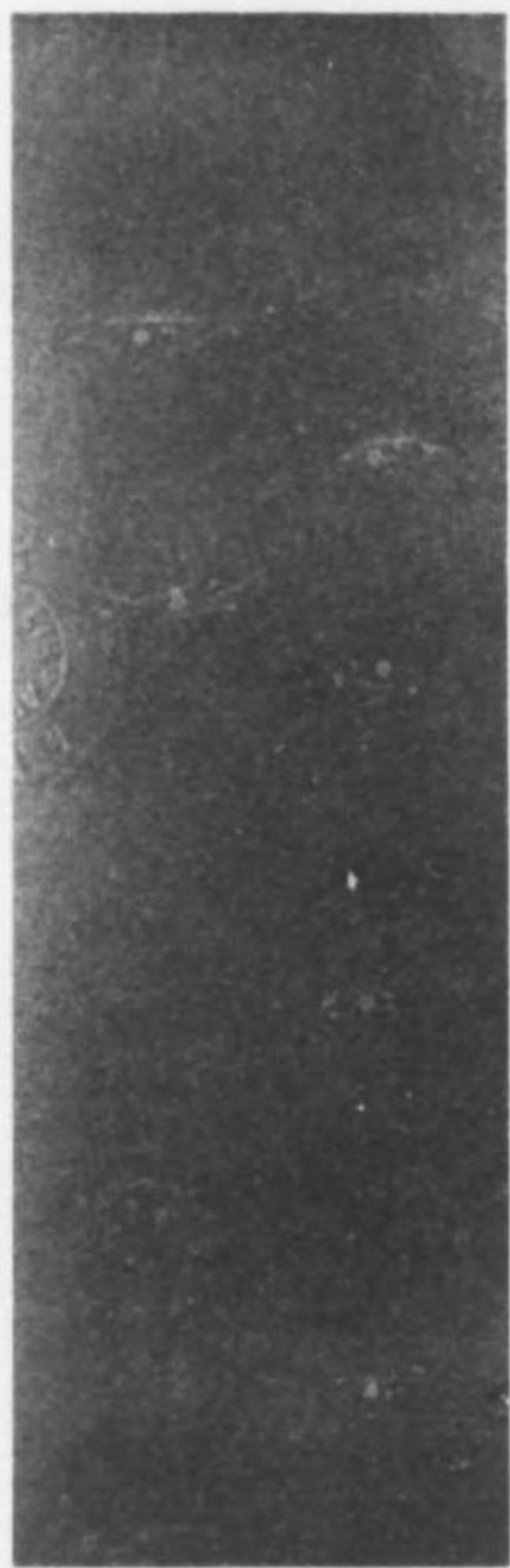
四拾貳 鉢の木

佐野の舟橋とりはなれし
本領に安堵して歸るそ
うれしかりける



四拾参 鉢の木

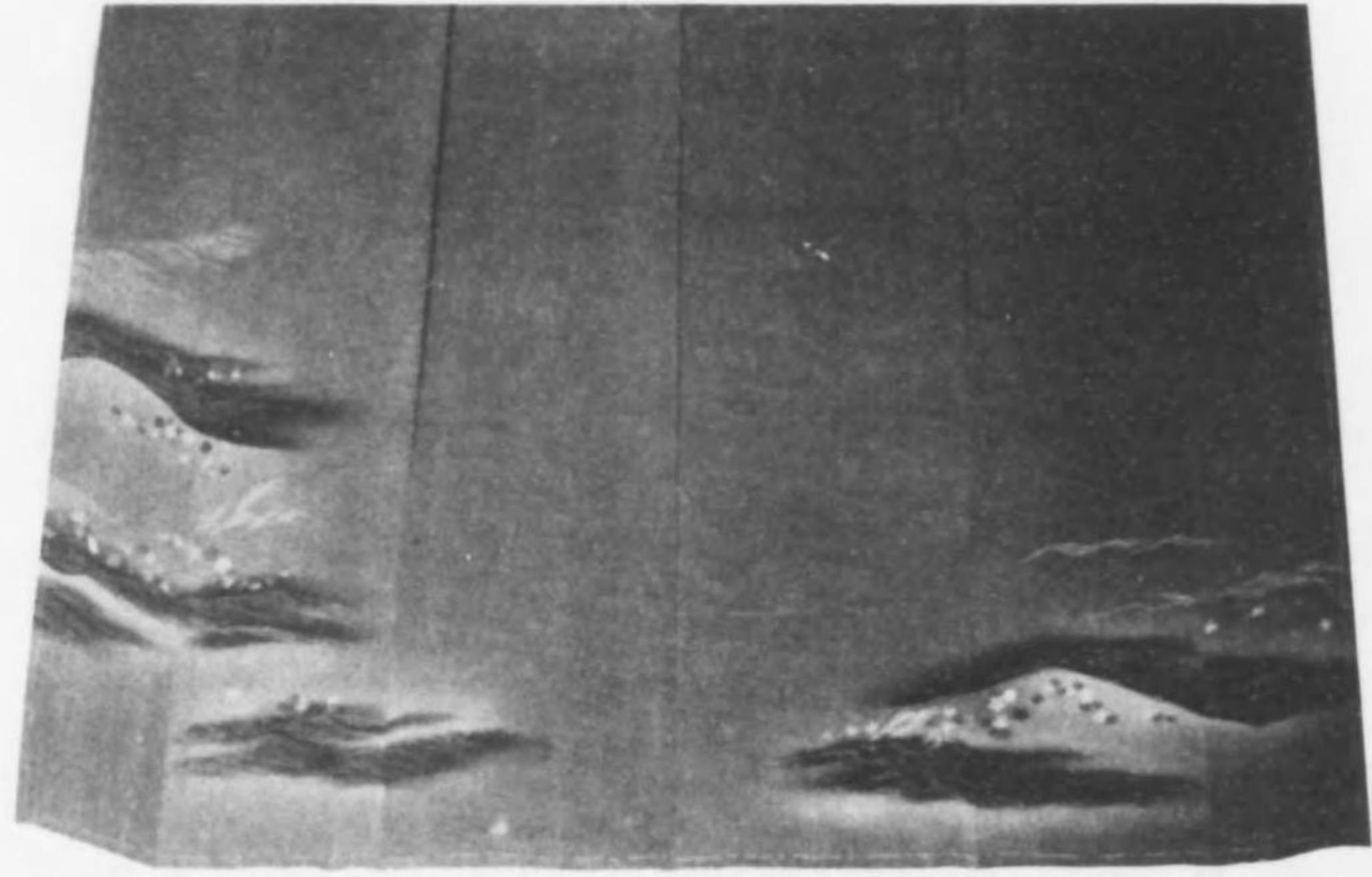
窓の梅の北面は雪封して寒むくとも



四拾四

鉢の木

加賀に梅田途中に榎井上野に松井田



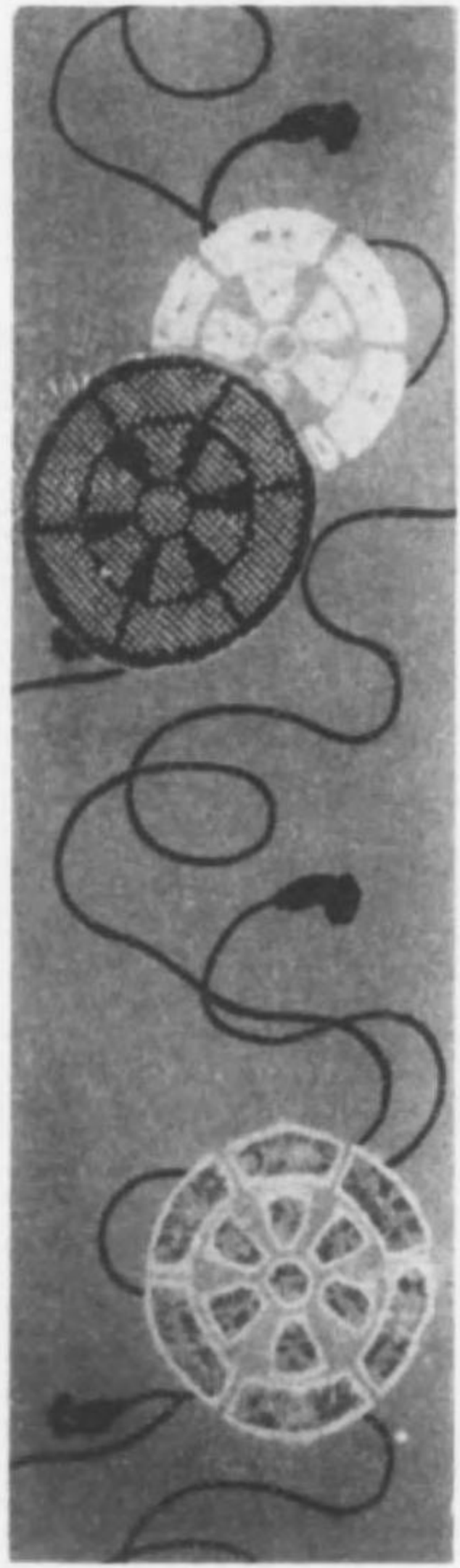
四拾五 草紙洗小町

まかなくにまにを四とて行きの
浪のうね／＼おひしけるらん



四拾六 草紙洗小町

時雨にぬれて洗ひしは紅雲の御なりけり



四拾七 土車

名も高かりし日月も地に遠近の土の車

四拾八

山

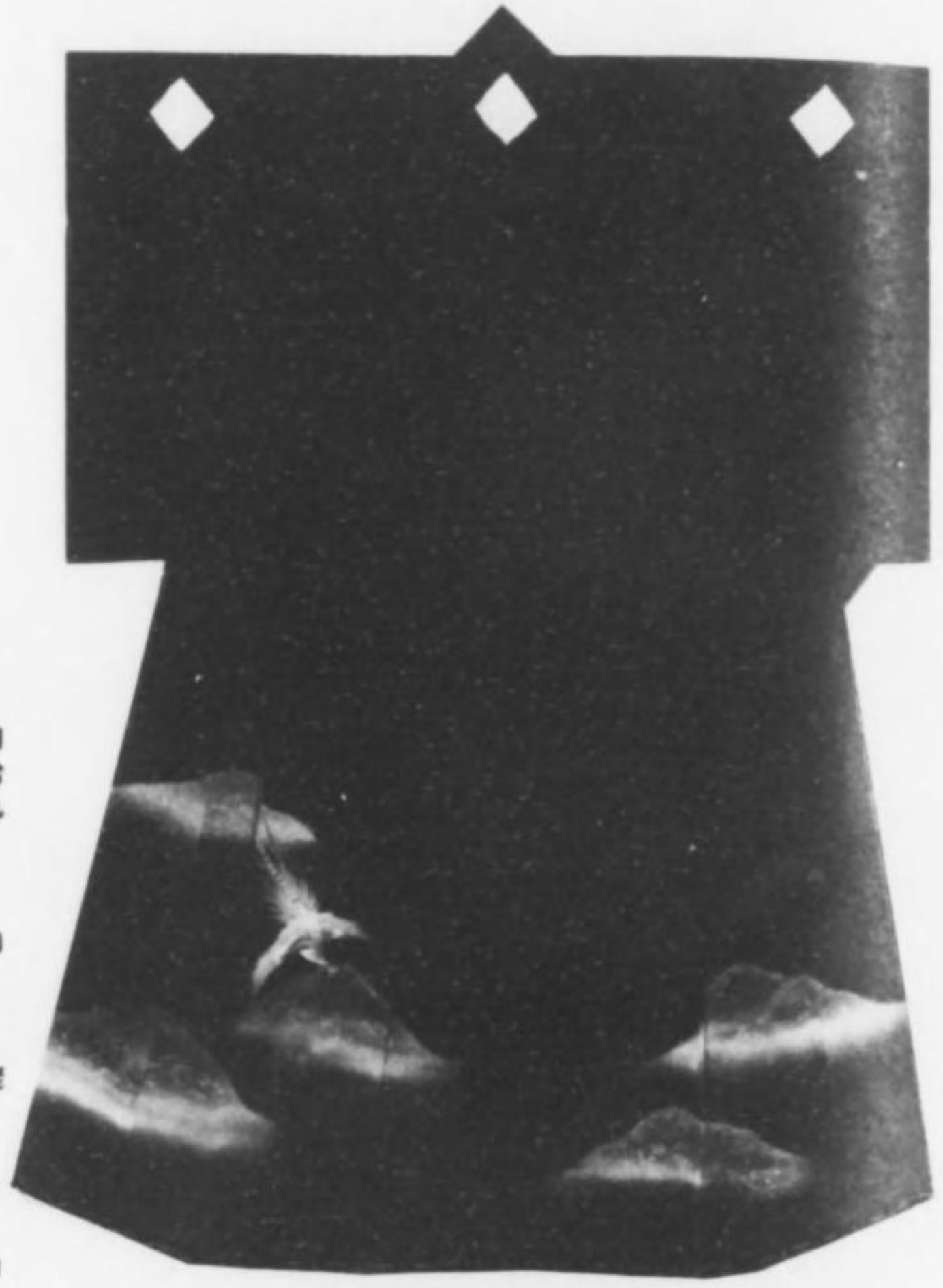
鏡

一

山

鏡

二



四拾九

山

鏡

山

又

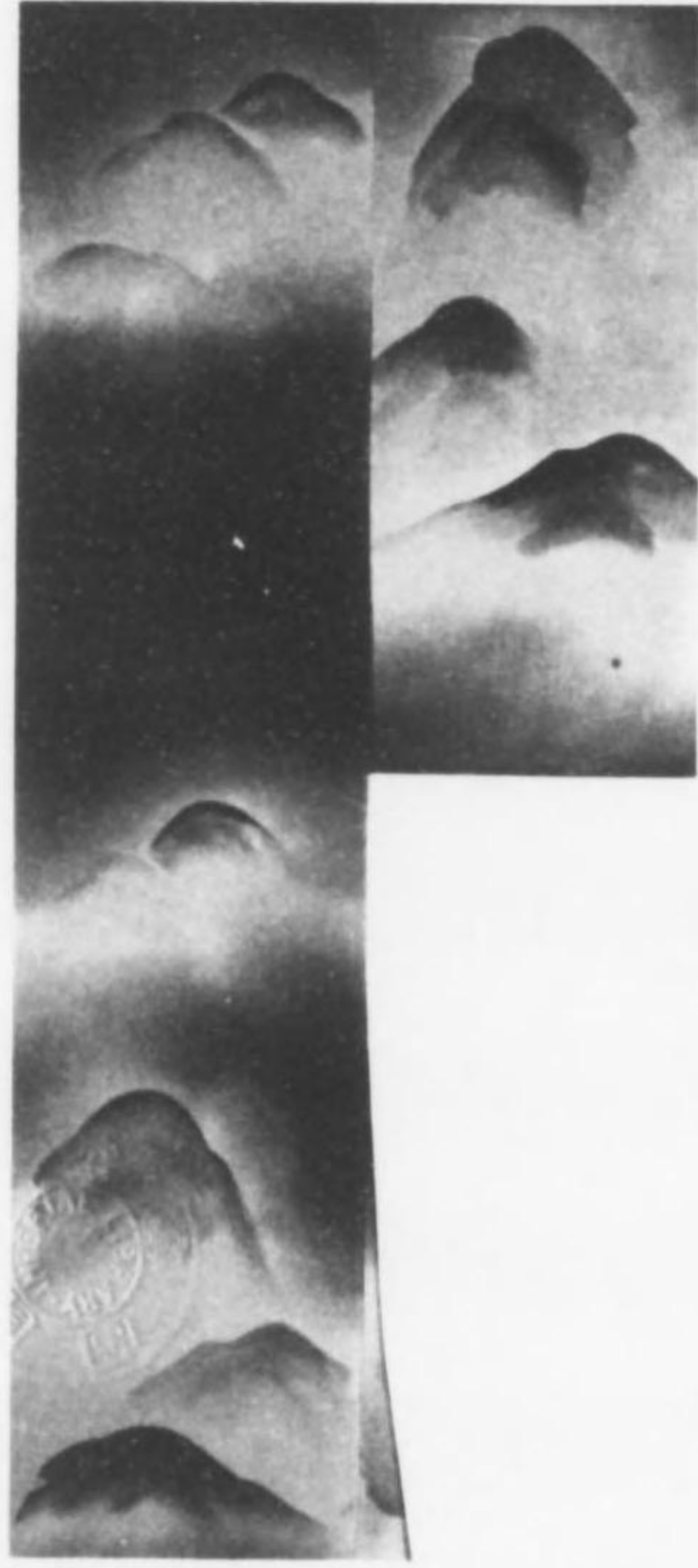
山

の

山

め

くり



五拾

山

鏡

冬

は

さ

え

行

く

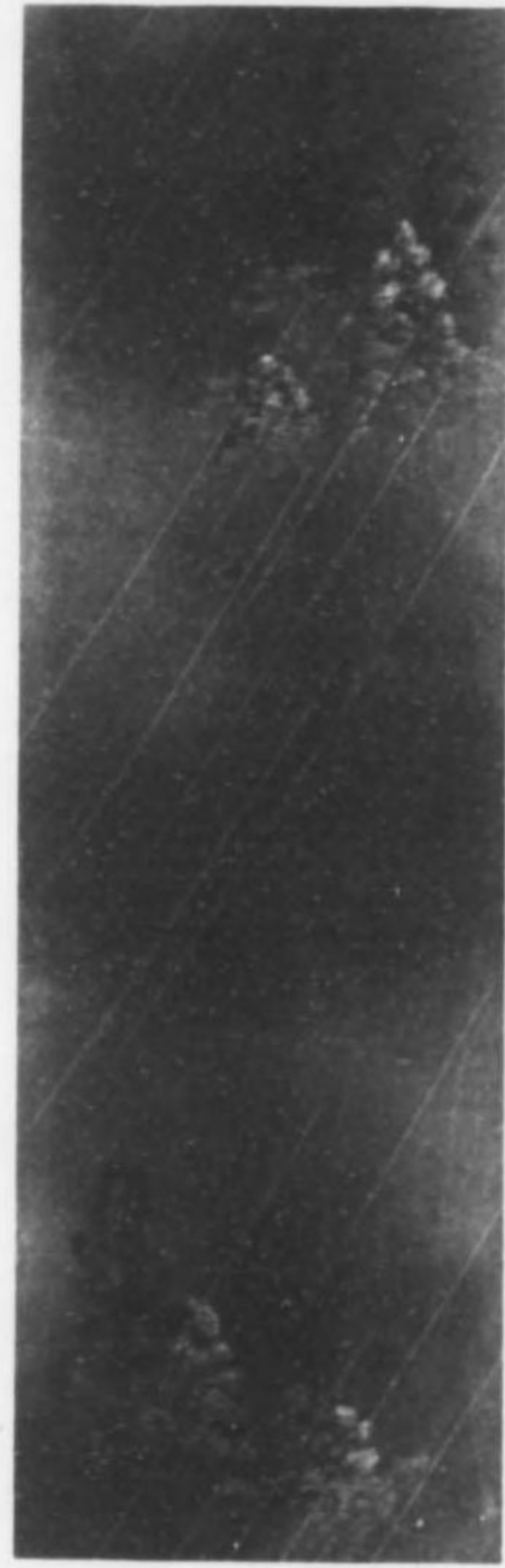
時

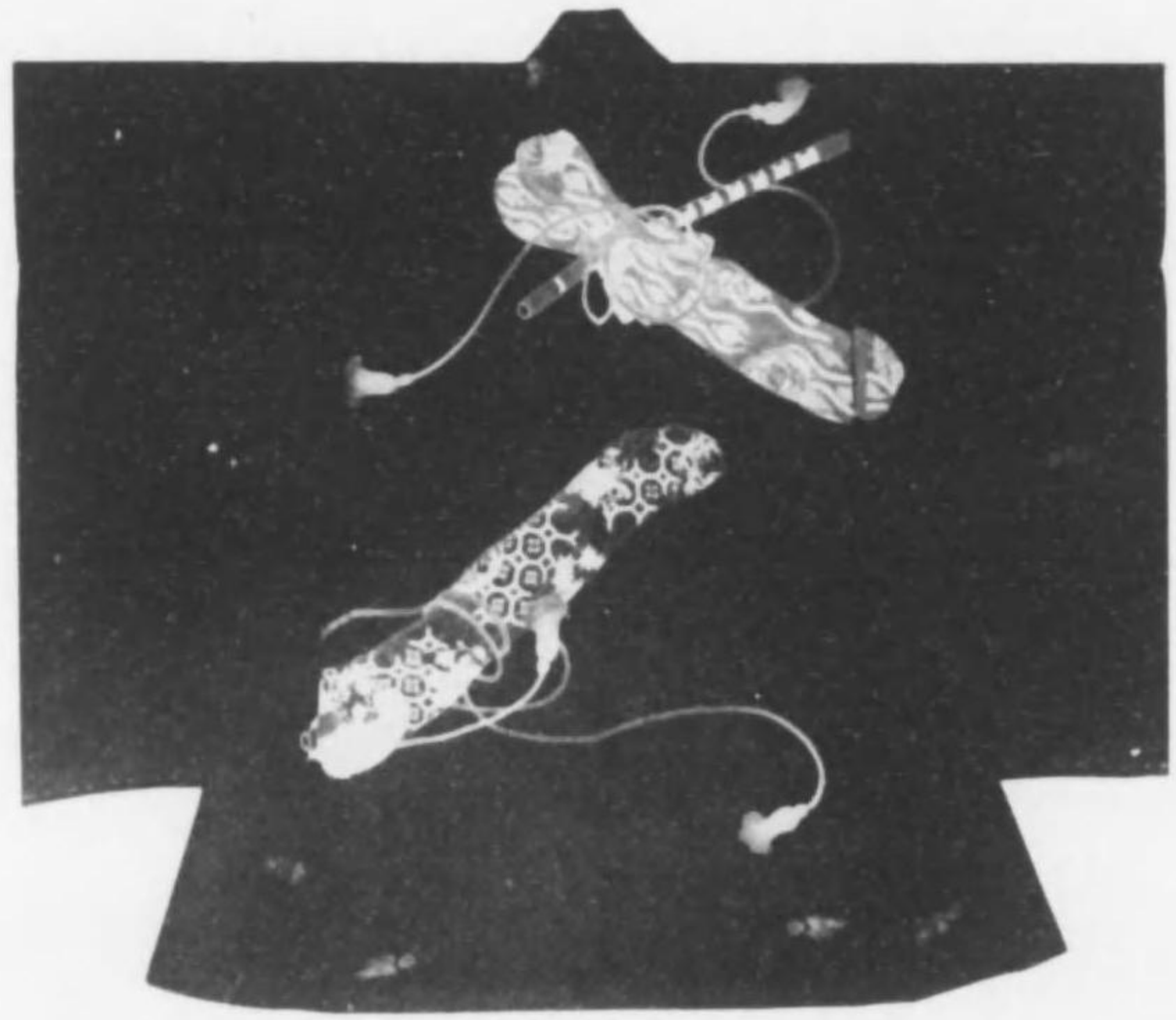
雨

の

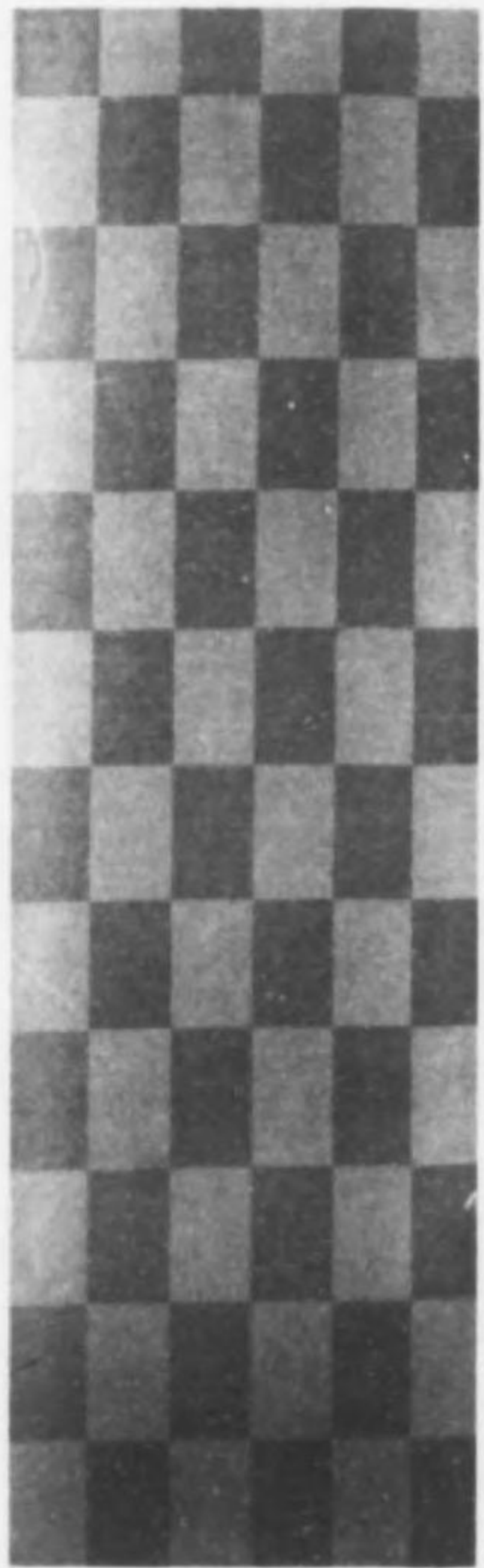
雲

の





五拾貳
種
の
種



五拾參
石
櫃
一
疊
臺
の
文
様



五拾肆
石
櫃

牡丹の花よまほひ満ちく

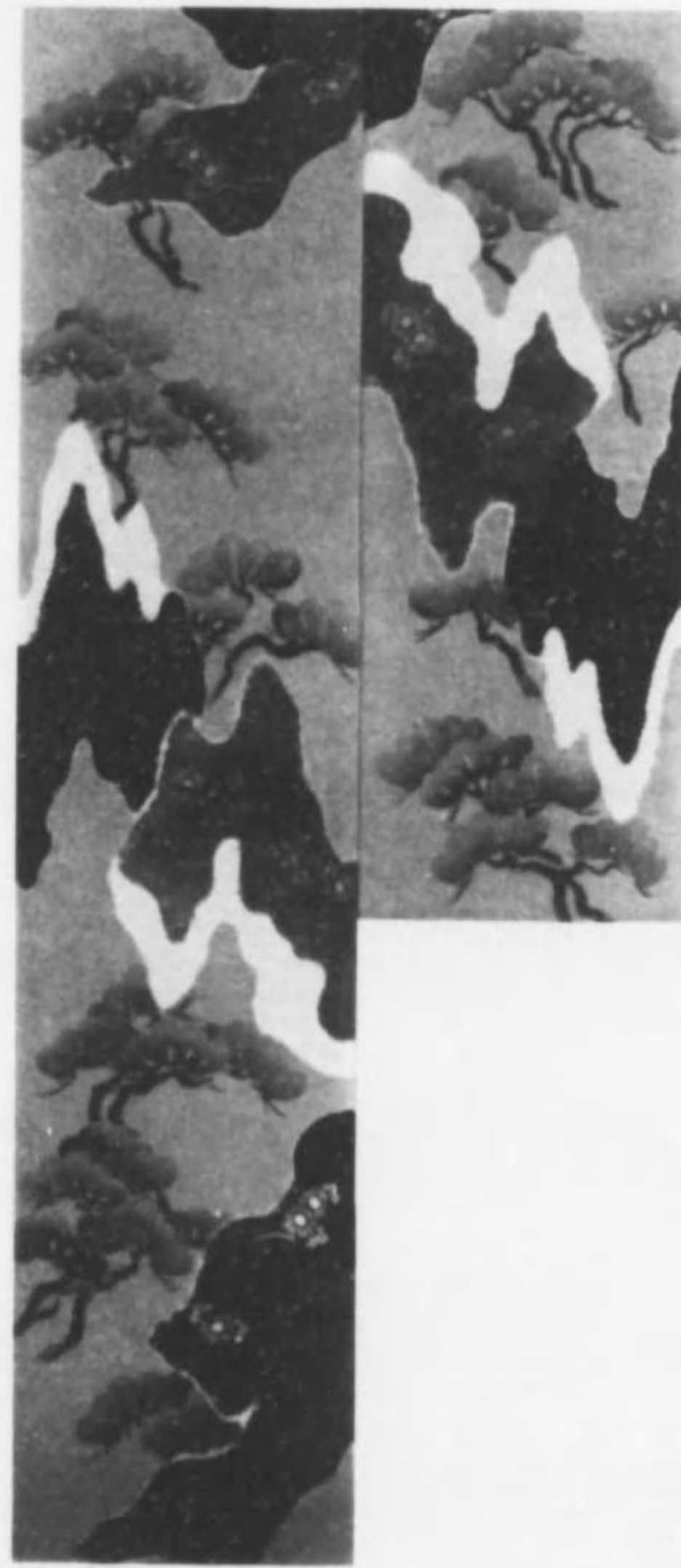


五拾四

高

砂

高砂の松の春風吹きくれて
尾上の袖もひよくなる

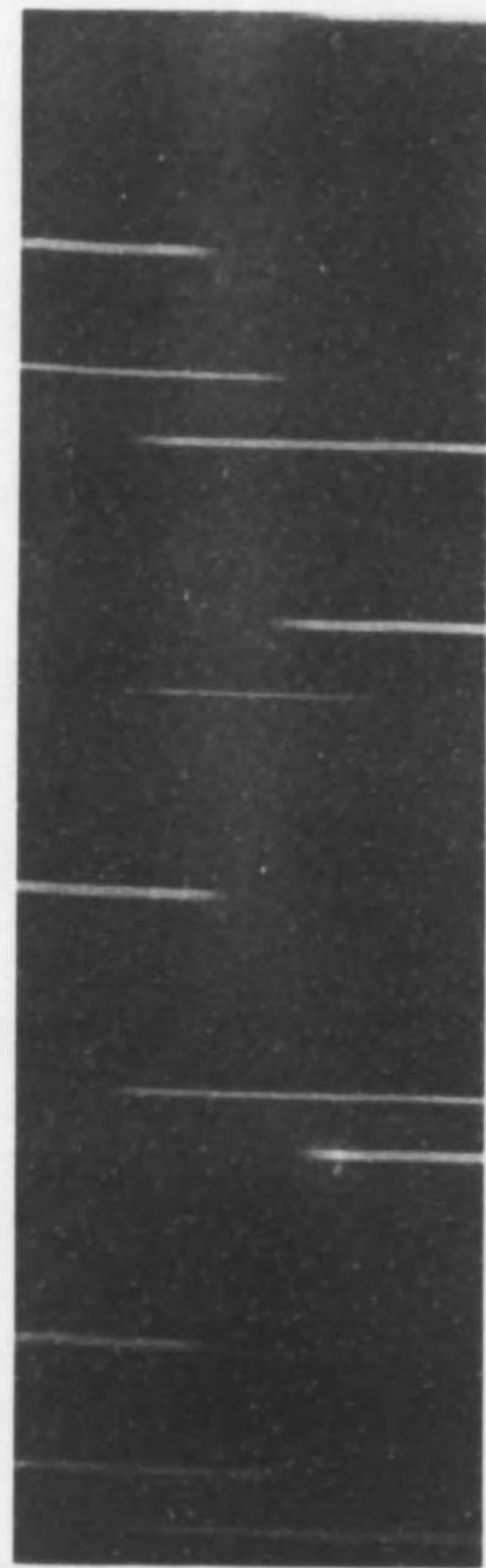


五拾五

高

砂

始皇の御狩にあつかる程の木なりとて異國にも高民これを買致す



五拾六

高

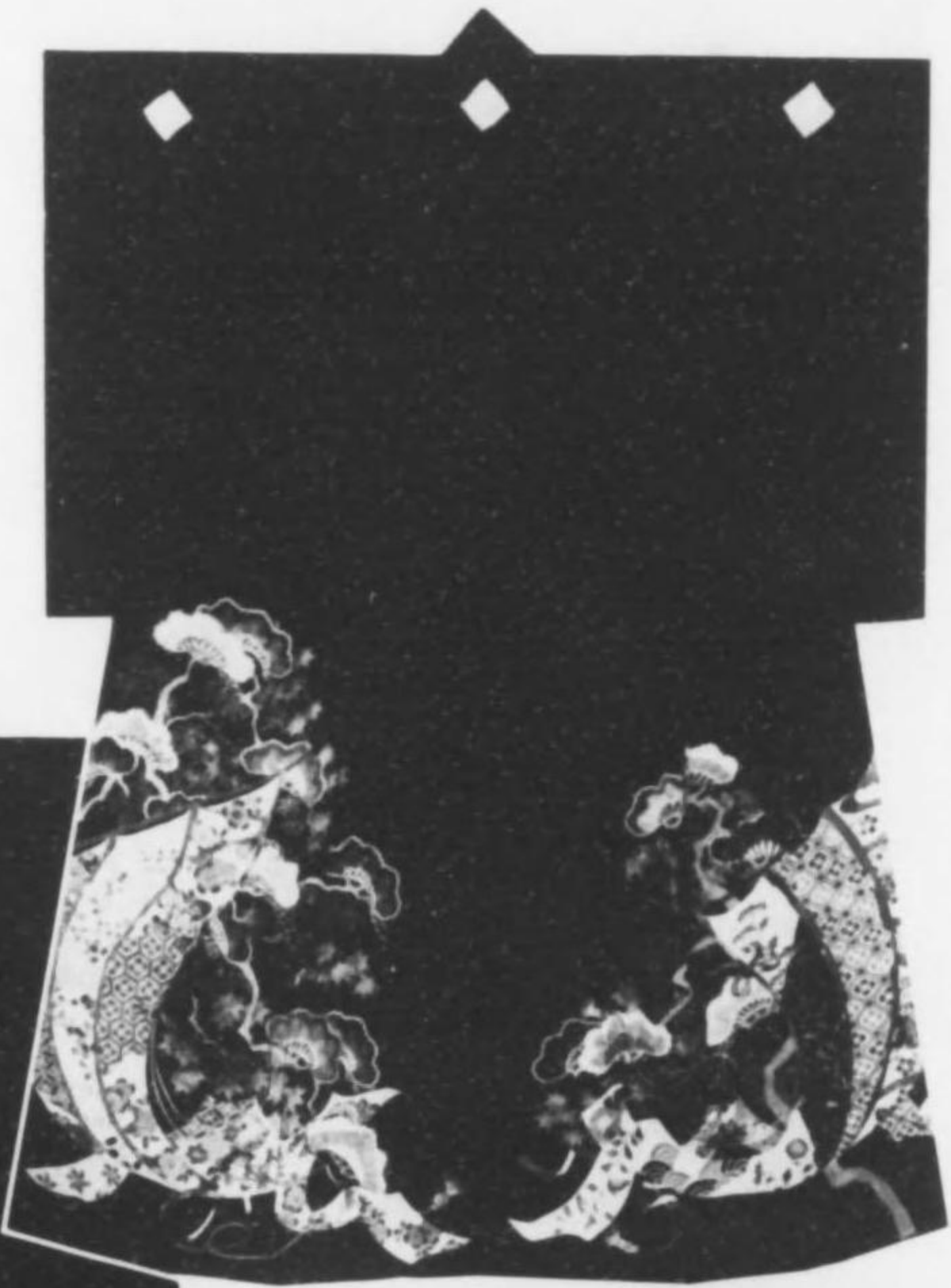
砂

波は波の磯かくれ音こそ壺のみちひなれ

六輪

紅葉
袴

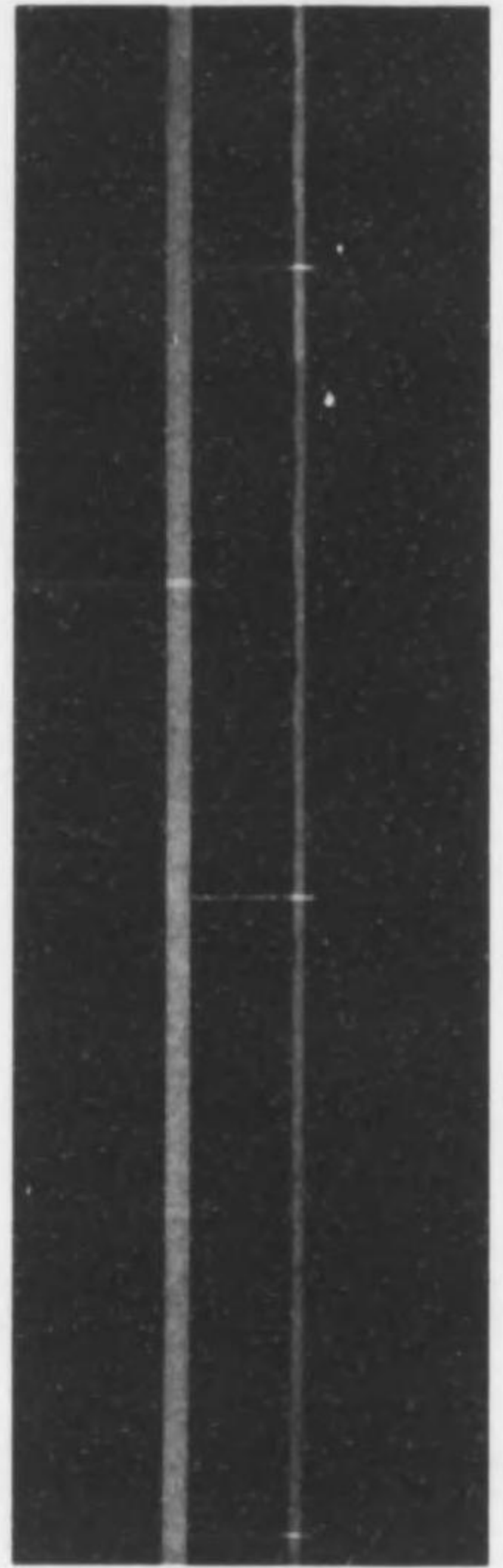
はつたき 袴の風のかげたる上からみは紅葉の
紅葉を渡らば御なかたへぬとまの木の下にたち
よりにて四方の菊をなめてははるく休かたまへや



六輪

威
陽
宮

のはれは玉のきさはしの金銀をかかきてかゝり

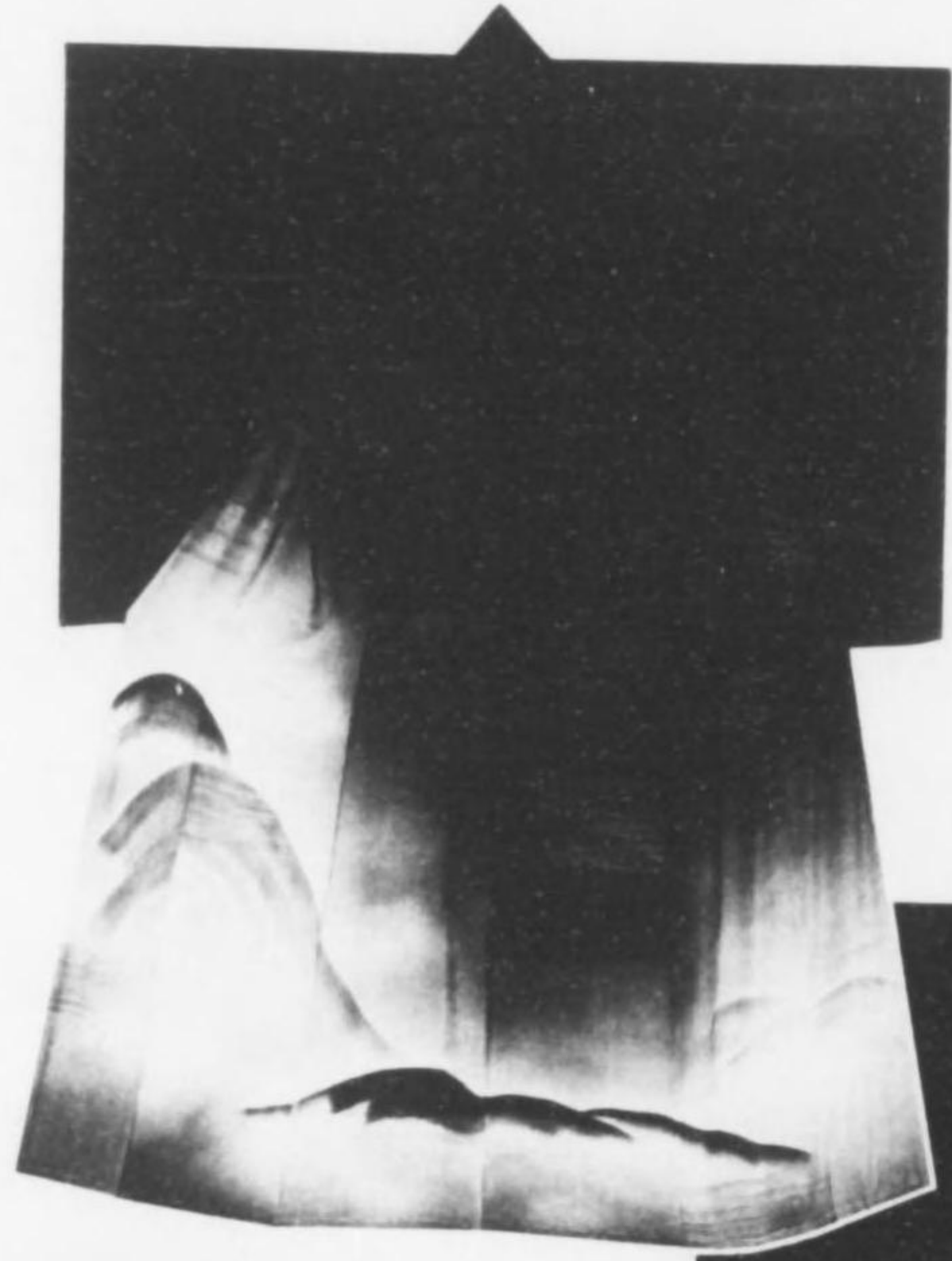


六輪

登
戸

老の波こゑて登戸の明暮にむかしの春のかへれかし



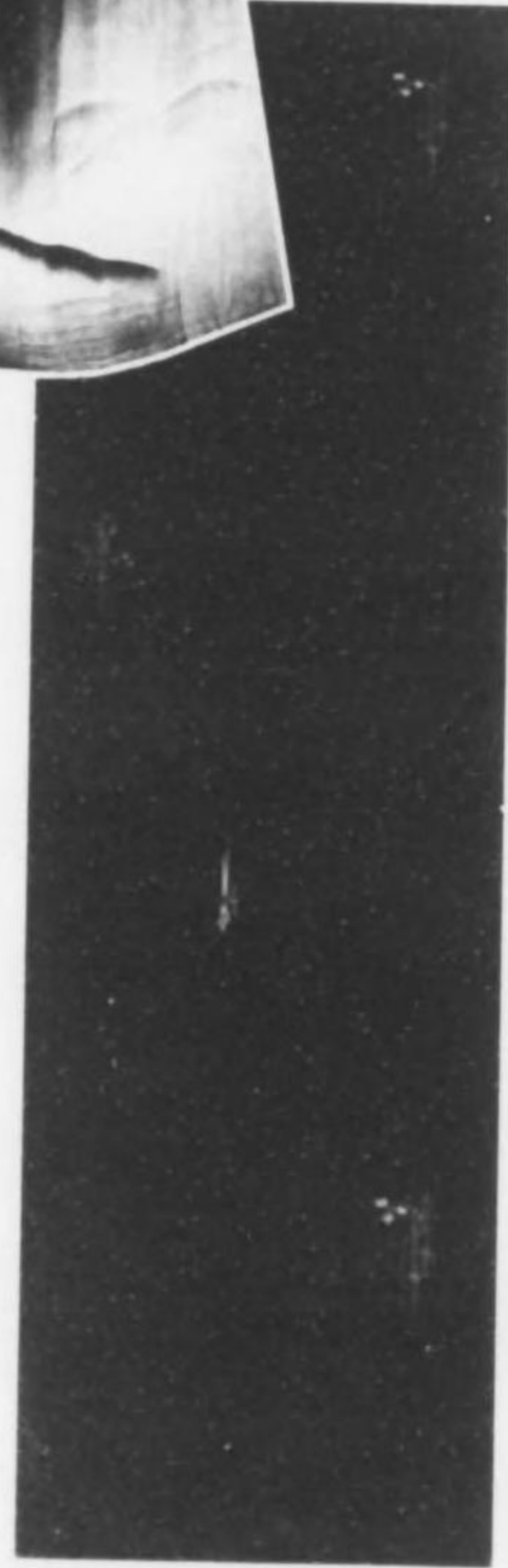


六拾参

山

続

山又山の山めぐり



六拾四

熊

野

草木は雨露の恵みやしなひ得ては花の父母たり

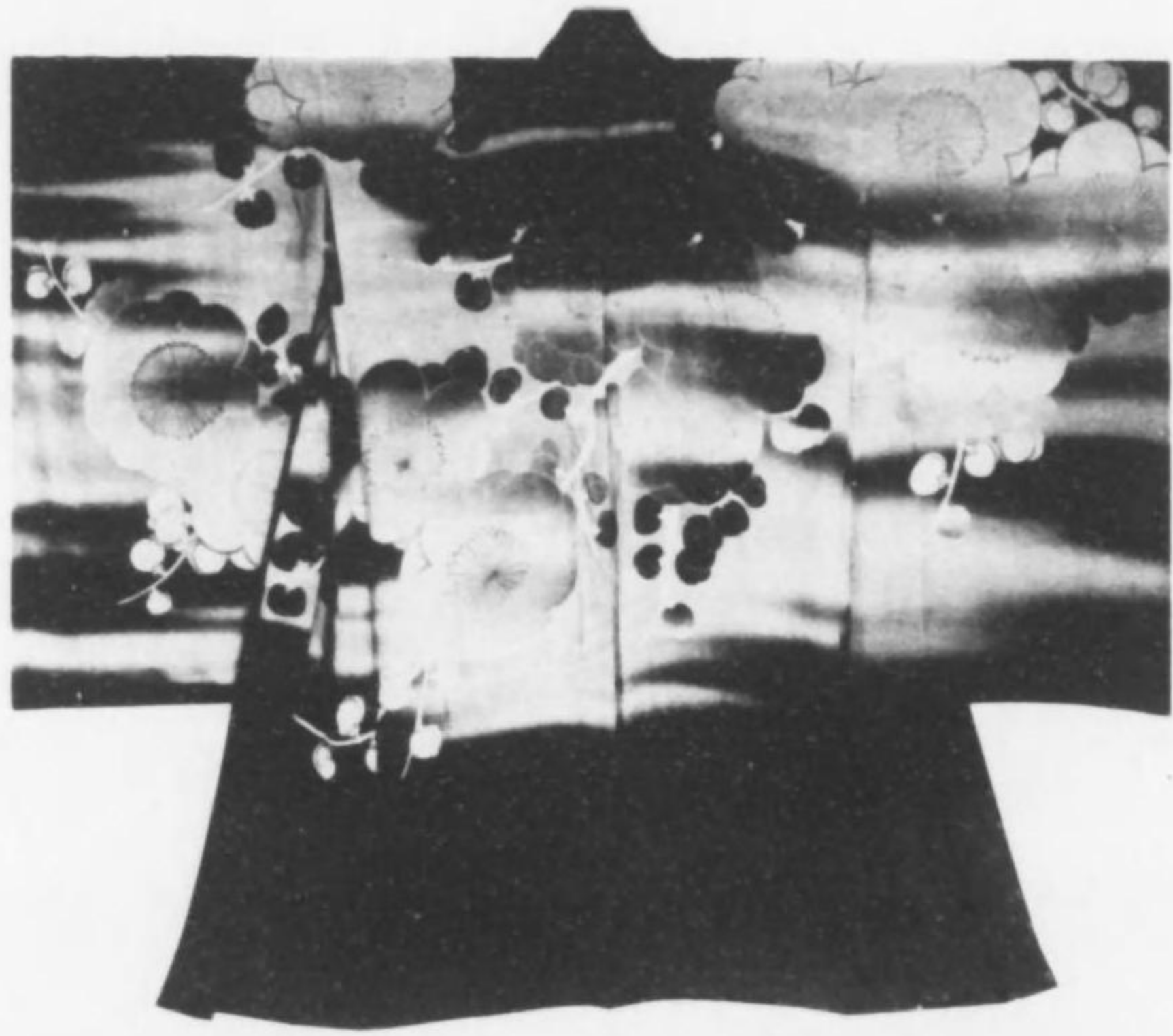


六拾五

定

家

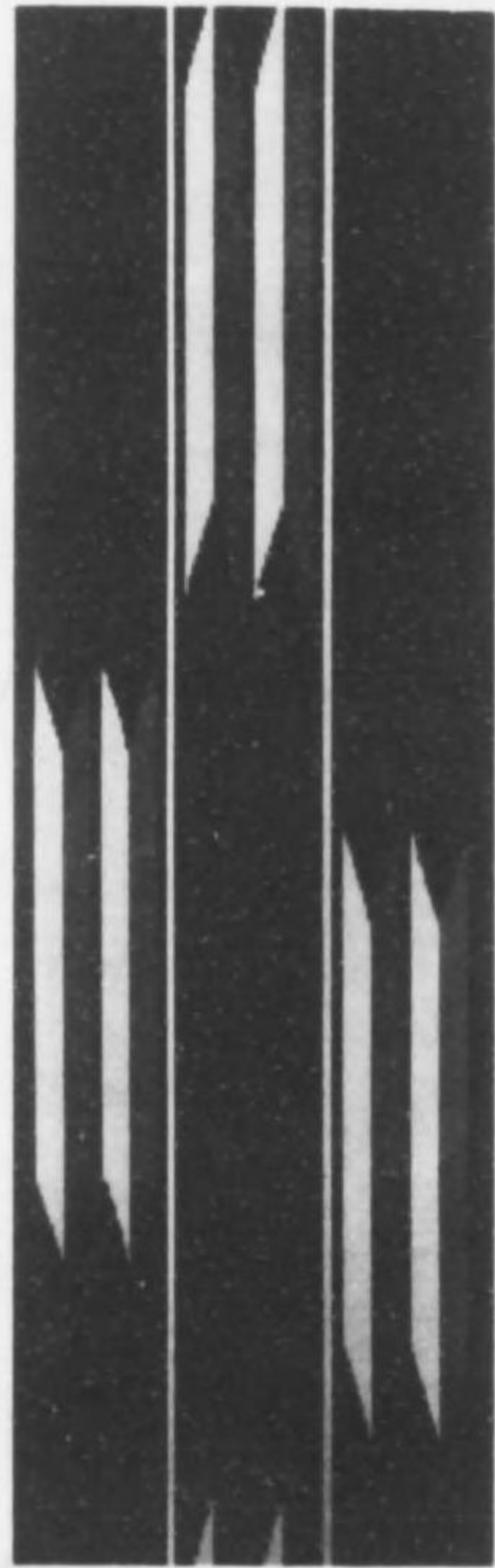
露ときえてもつたなや露の葉の



六拾六

彌
注
師

あらあひかたや鏡
梅の香の聞え候



六拾八

田
村

一たび放せば千の矢先



六拾七

田
村

あれこそ歌の中山詩四寺今無野まで見えて候へ



六拾九 鳥 道 船

うちなひく秋の川の穂波につれて
うきしつみおもしろの鳥の風情



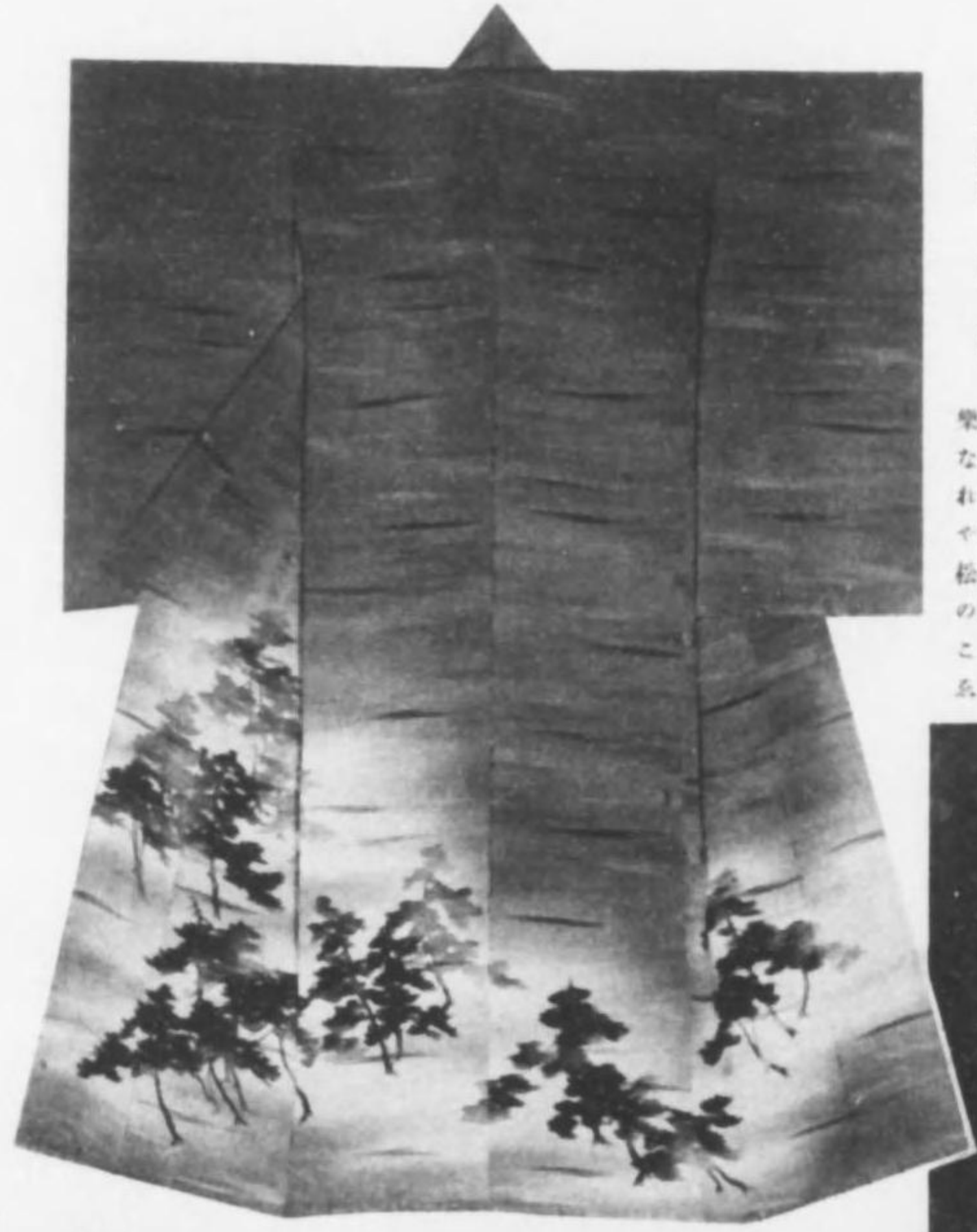
七拾 鳥 道 船

稻葉の雲に立ち去りぬ

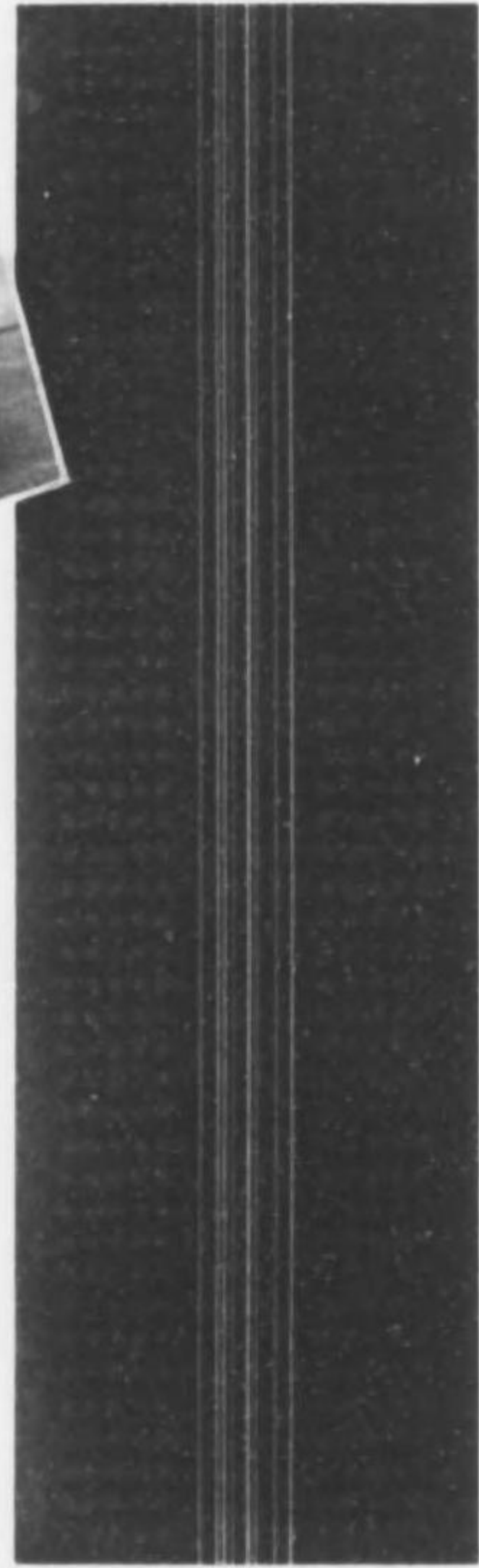


七拾壹 梅

月のかけもさし出ても
穽なからもなくさめんと梅のかけに



七拾貳
天
鐘
樂時お
なもも
れけし
すにろ
松秋す
の風
こ
ゑ



七拾参
半
部
目



七拾五
狂
言
山
伏
の
装
束
よ
り



七拾四
狂
言
通
員



七拾六

安宅

時しも頃は如月の十日の夜月の都を立ちいでて



七拾七

江口

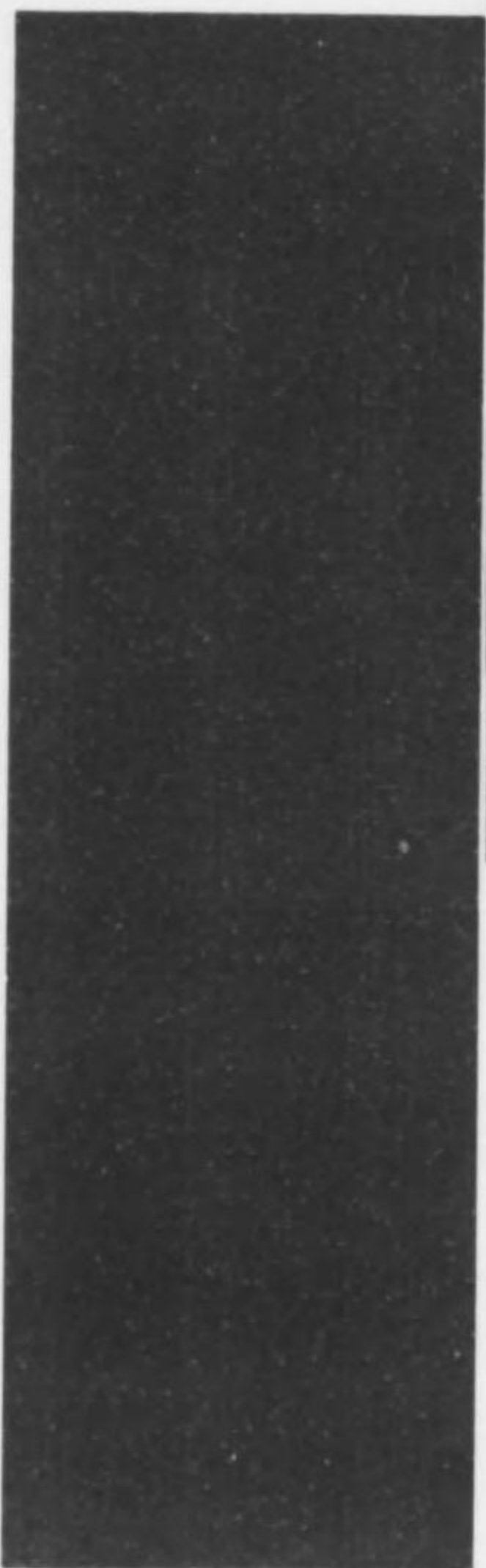
紅花の春の朝紅錦繡の山程をなすといへとも夕の風に誘はれ紅葉の秋の夕



七拾九

吳服

繞る唐衣の香かを今般島の道かけて言の誓草の花まで
もあらはし胡の色そへてこゝろをくたく雲の



七拾八

鶴亀

龜は萬年の齡を經
鶴も千代をや重ぬらん



八拾 柳 政
山も川もおほろくとして是等をわかぬけしきかな



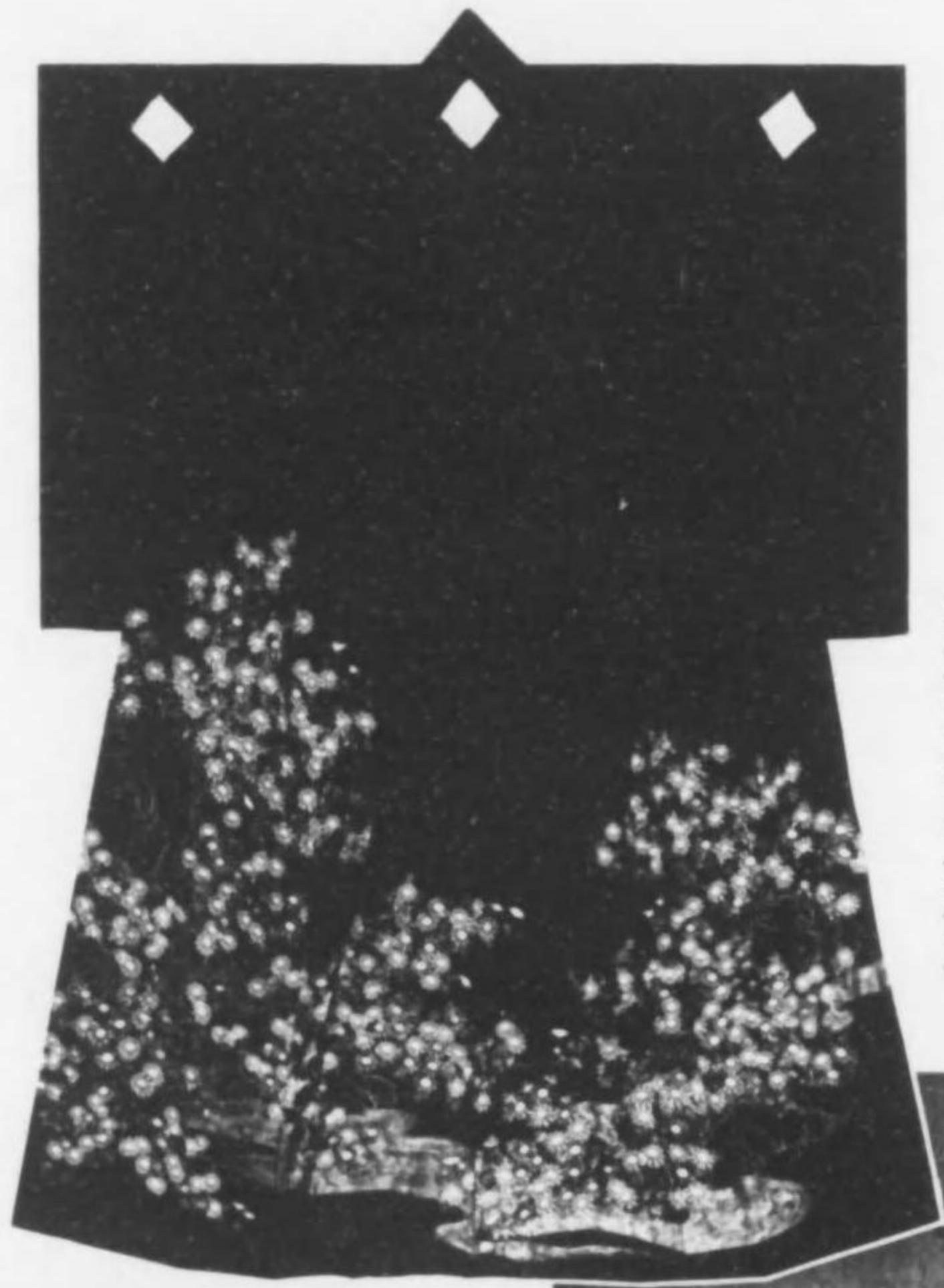
八拾壹 松 風
これはなつかし君こゝに須磨の清田の松の行平たちかへり
こは我も木蔭にいさ立ちよりにて磯松の



八拾貳 江 口
たそかれにたゝすむ蔭はほのくに見えかくれる河くまに



八拾参 老 松
左に花園の輪塔あり翠雲紅田の櫻音を忘れず



八拾四 菊 草

所は願懸の山路の菊水くめや
むすへやのむともくつきせしや



八拾五 定 家

本々の柄も冬枯れて枝に残りの紅葉の色所々の有様までも都の
けはひ一人の泳めことなる夕かな

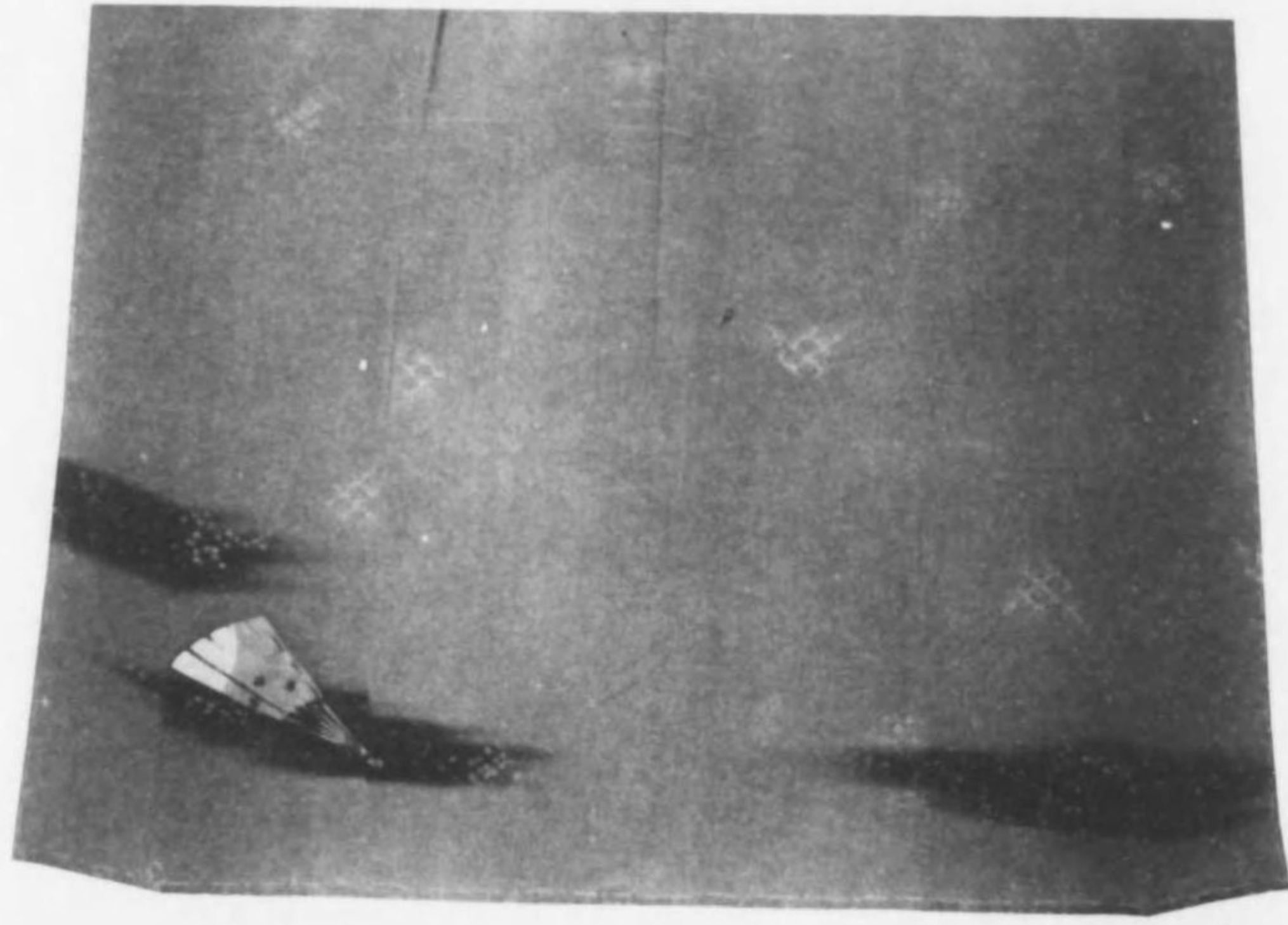
八拾六 御 能 人 形



八拾七 巴

あれは巴か女武者





八拾八 繪 摺
ソキ次第
月の名もかき秋なれず崎捨山をたつねむ



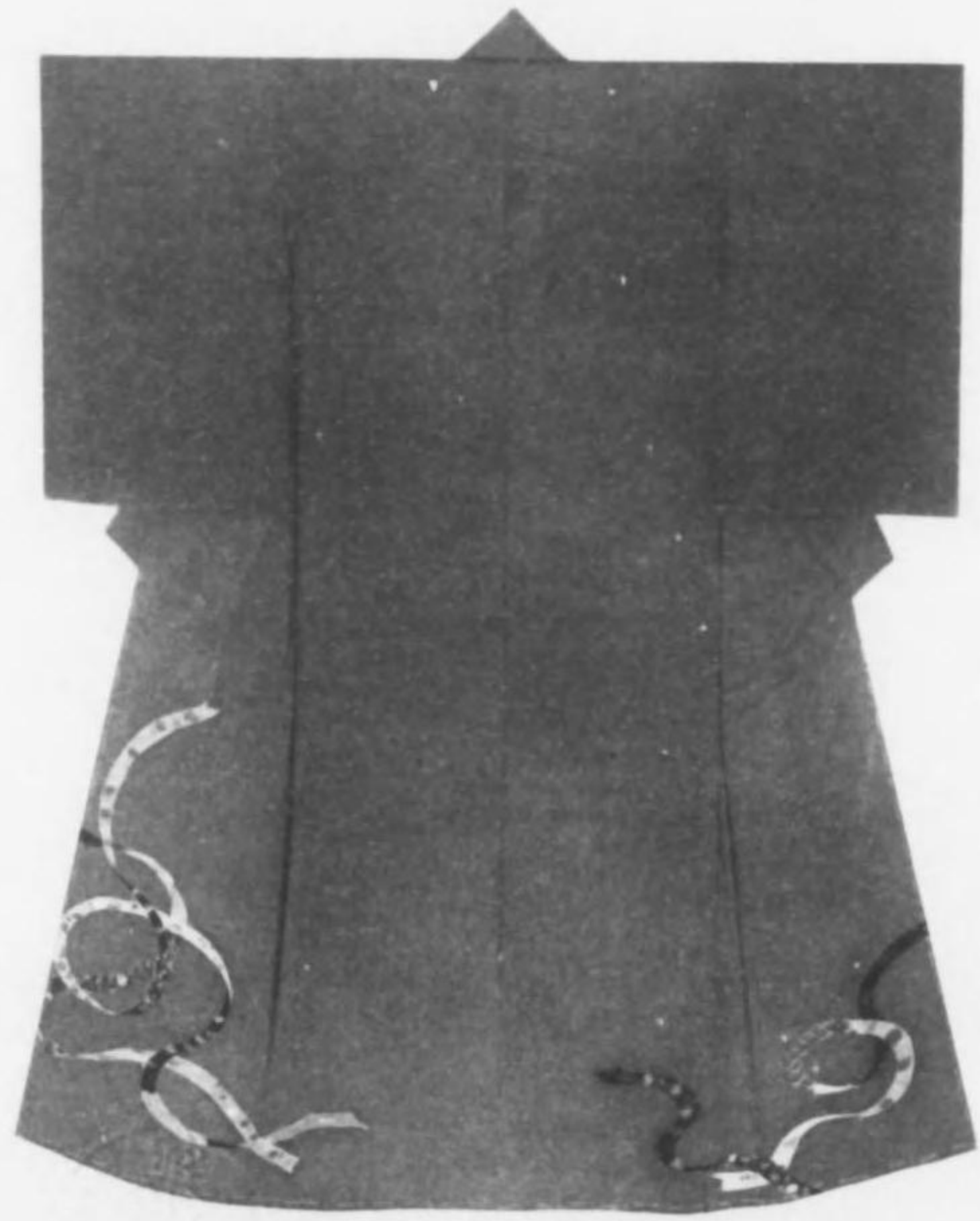
八拾九 高 砂
春の林東風にうき秋の虫の北露になくも



九拾 狂 言 梅 山 伏



九拾壹 高 砂
松は非常のものたにも相生の名はあるそかし



九拾貳

揚貴妃

小書に依 玉すだれ



九拾參

圖

波

春の波も久し雪にも梅の冬通り

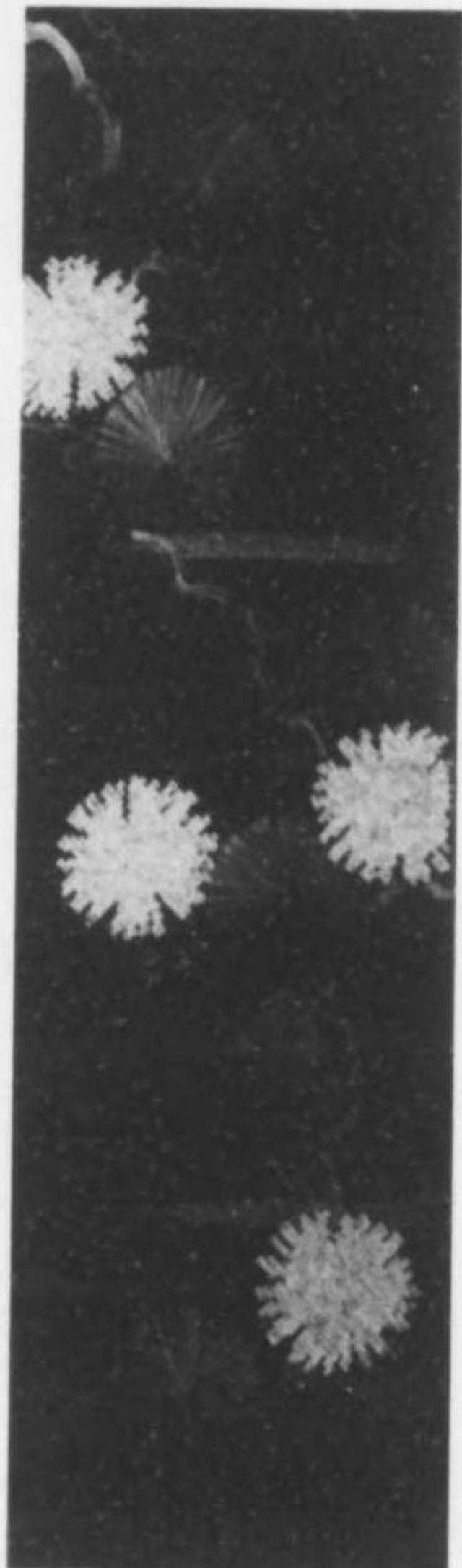


九拾五

高

砂

なとも落葉のつきせぬはまことなり松の葉の

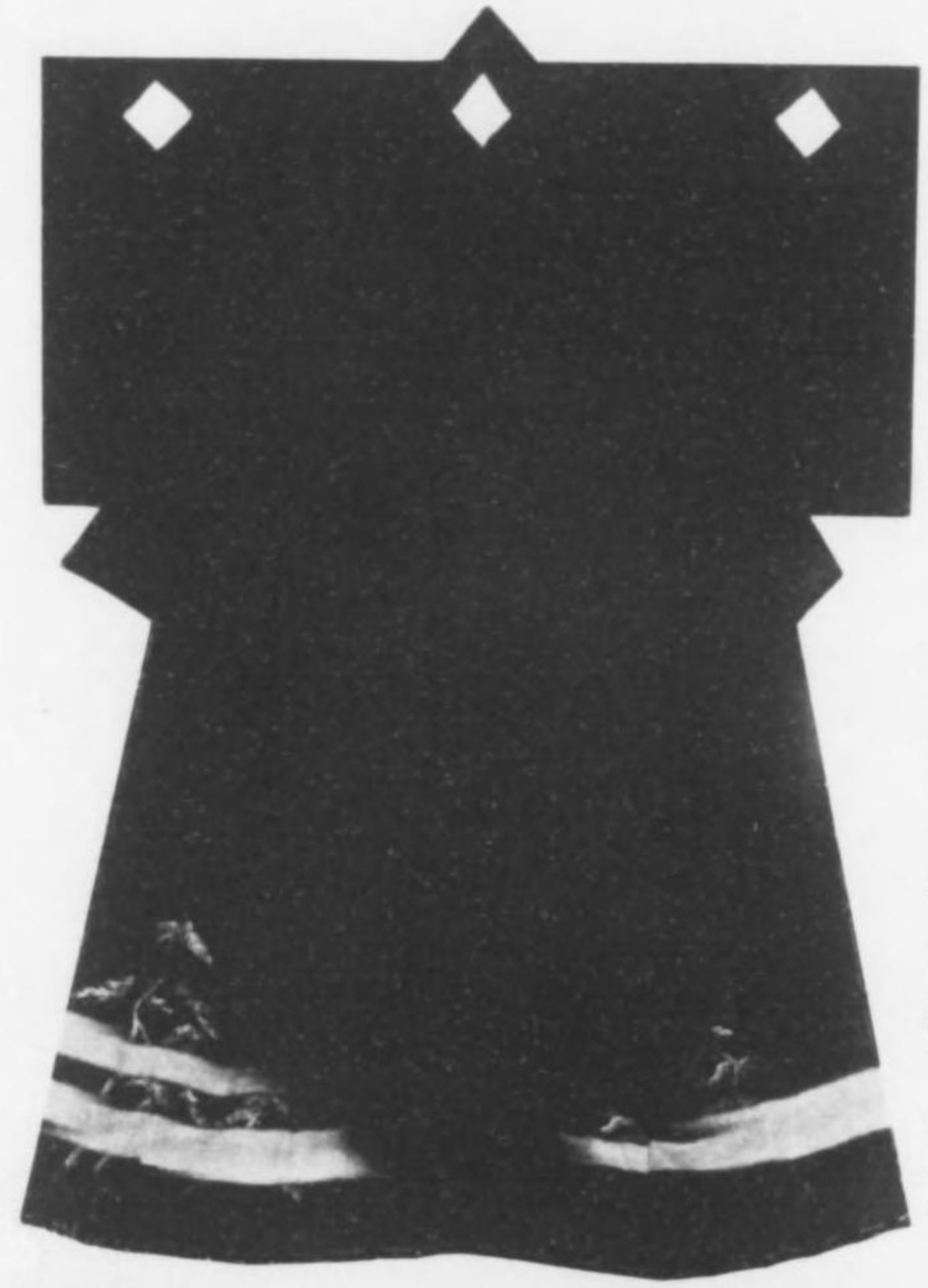


九拾四

老

松

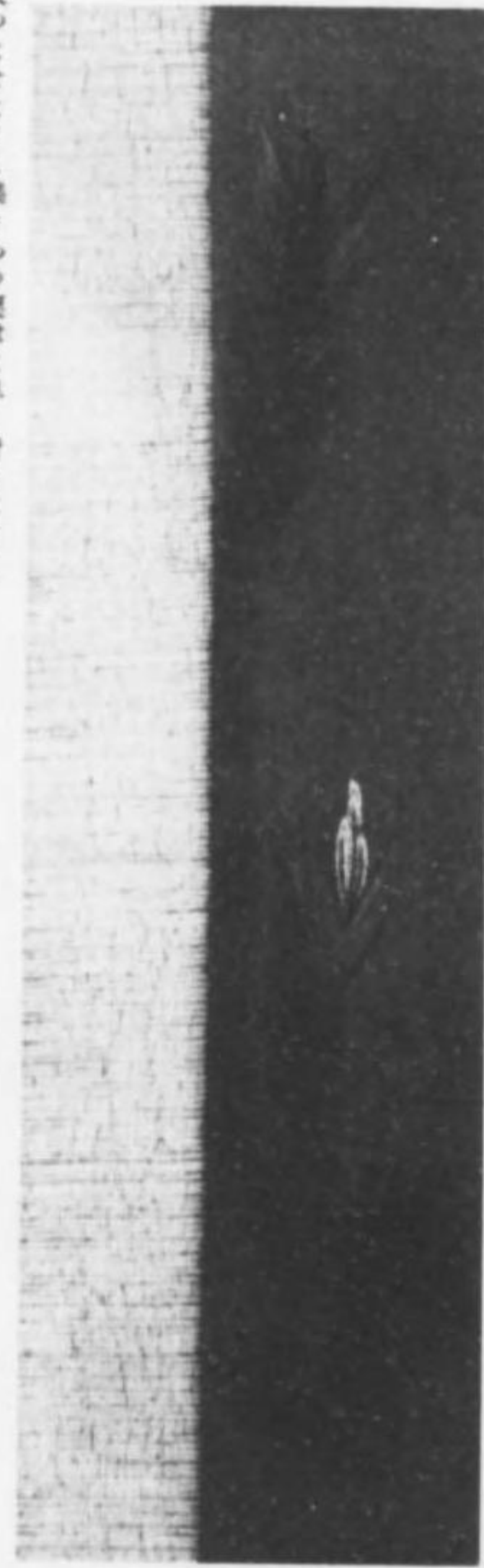
名こそ老木の若みとり



九拾六

兼平

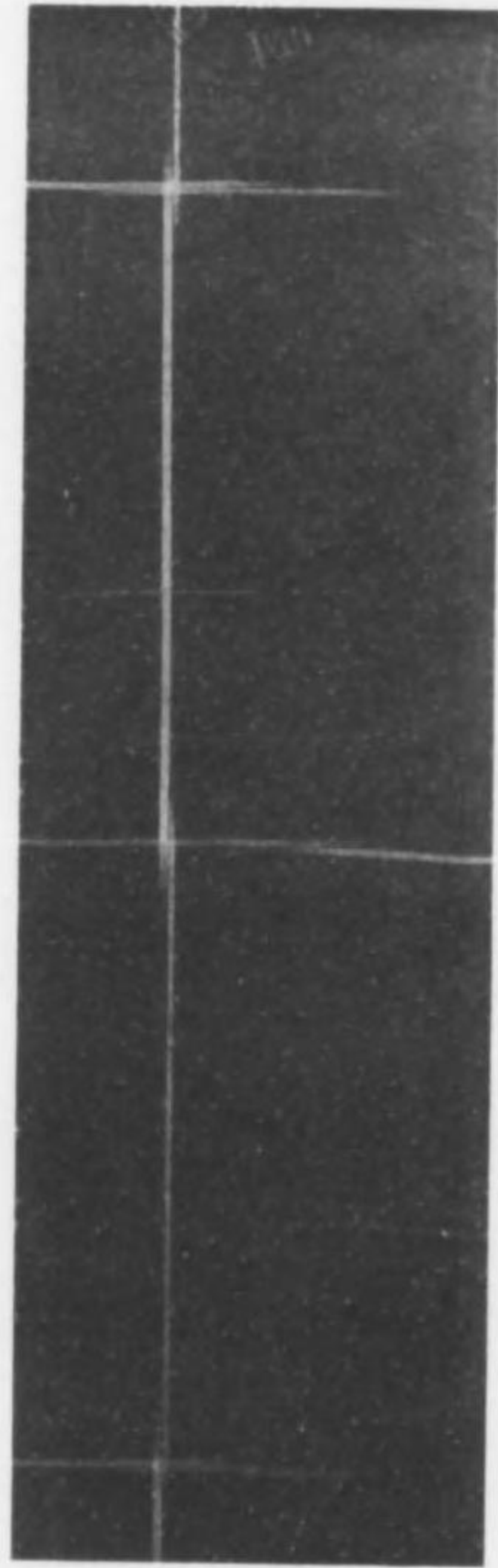
さし波のよせよく、崎さわの栗津にほく着きにけり



九拾七

老松

梢は若木の花の抽



九拾九

翻波

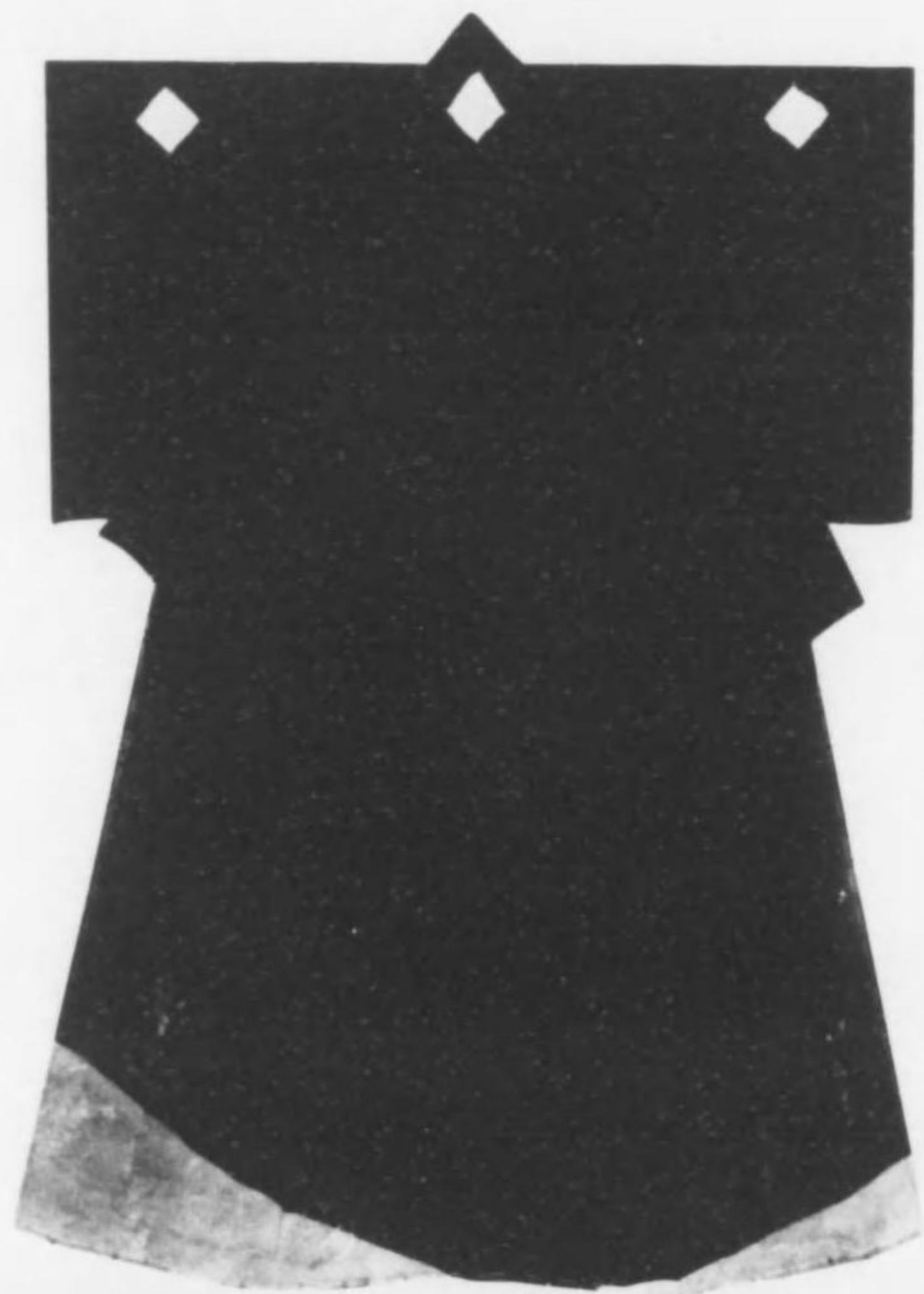
山もかすみて浦の春浪風静なりけり



九拾八

老松

雨に寂々たる瓊門あり斜日竹竿のもとに透けり



百

松

虫

そてふれつく市人の作ひいつる
道の邊の草葉の露もふかみより



百

雲

通

小

町

花

摺

こ

ろ

も

の

色

重

ね

装

茶

の



百

松

馬

天

狗

立

ち

越

へ

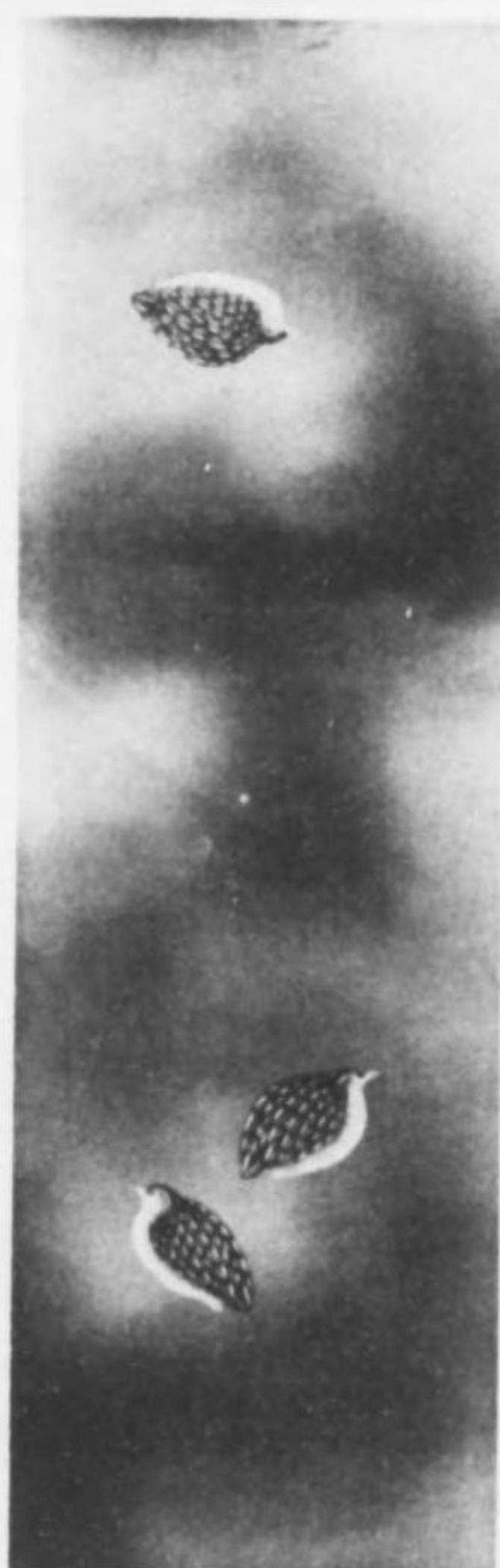
と

そ

な

か

ら



百

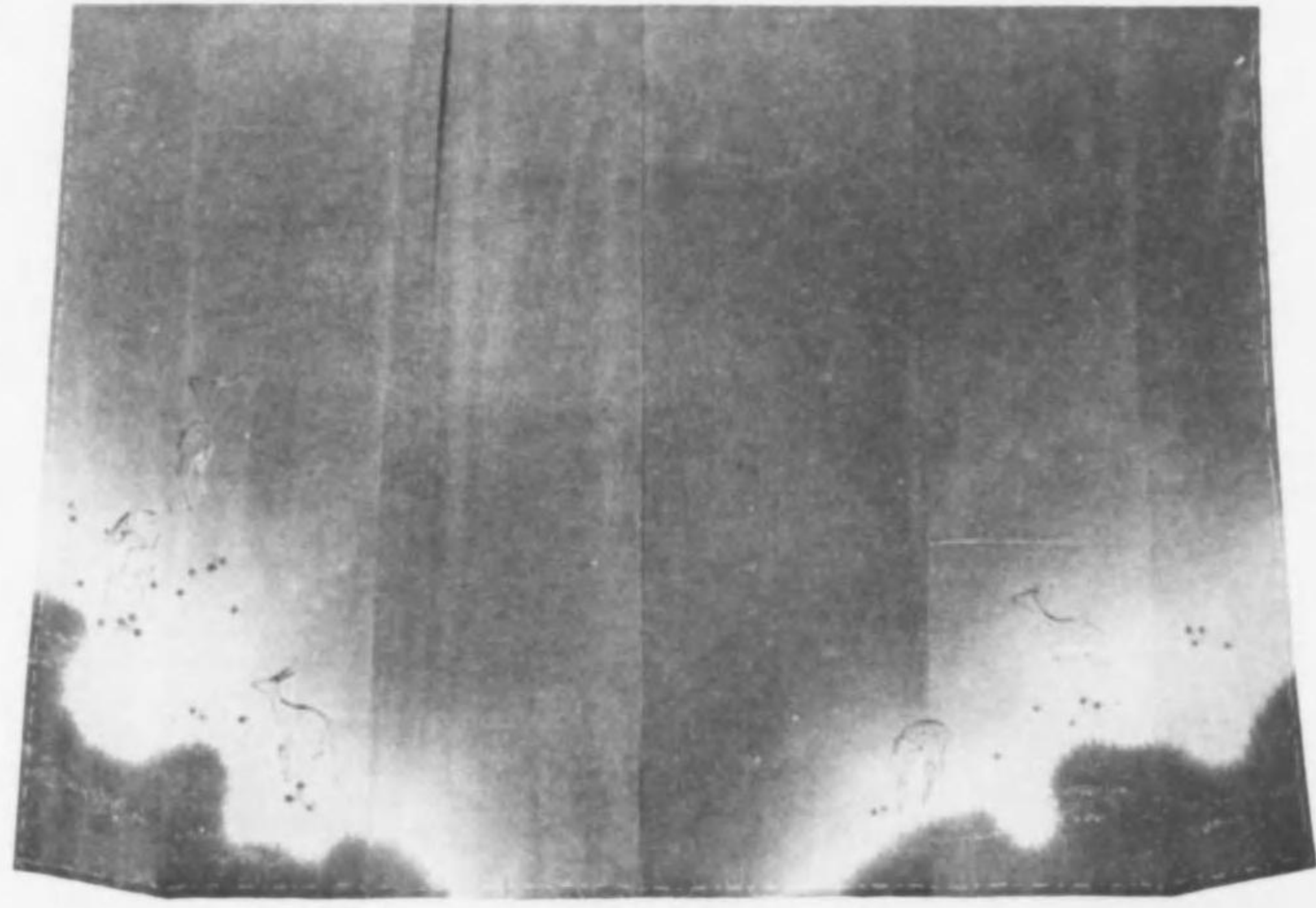
風

水

六

趾

の



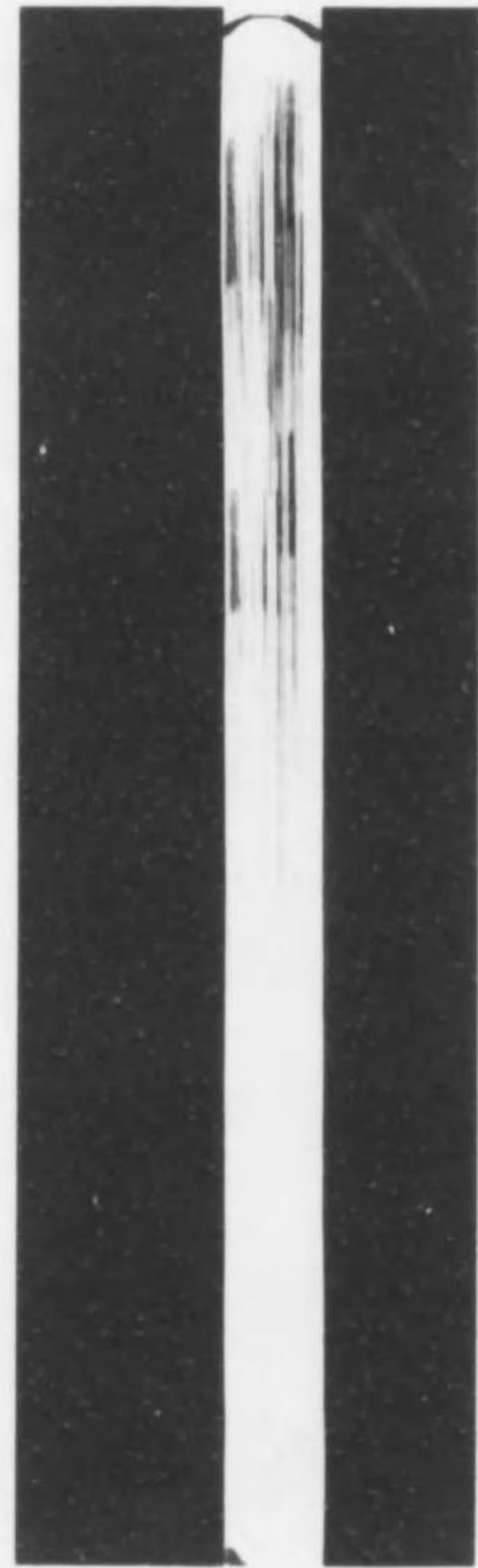
百四 春日霞神

是も雨の都路や奈良坂こゑで
三笠山春日の里につきにけり



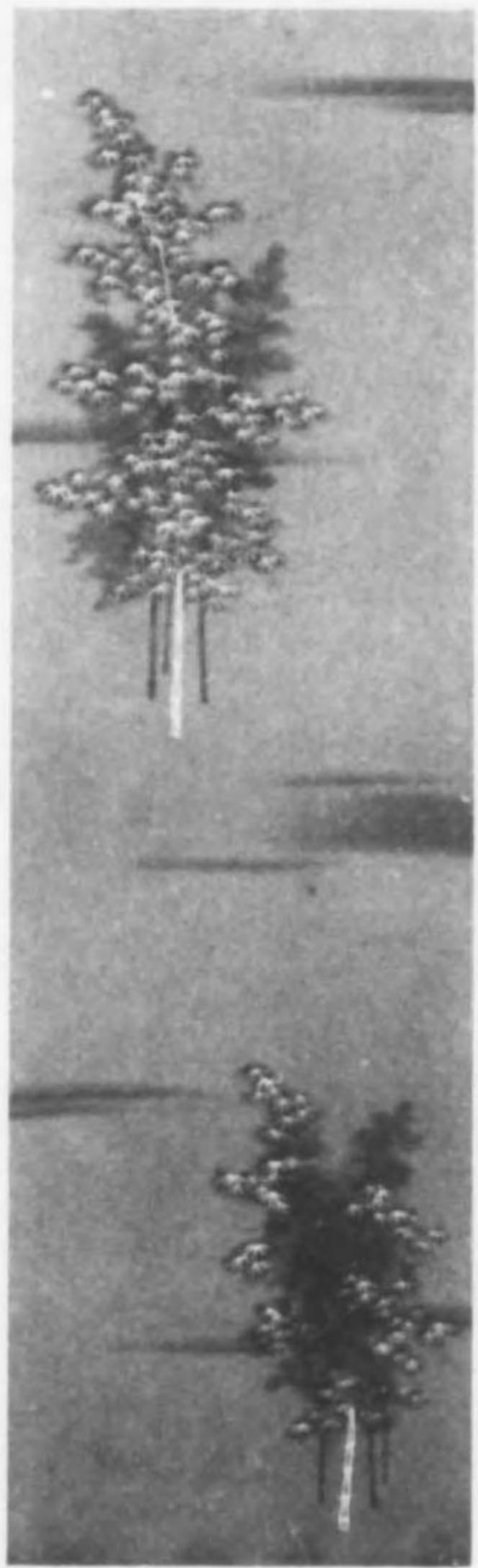
百五 大佛供養

さしも榮えし花紅雲の露水の秋の秋の如何なれば



百六 班女

戀すてふ我名はまたき立ちにけり人しれすこそおもひそめしか



百七 龍虎 詠めやる遠山本のむら竹の段こめたるおもしろさよ

百八

小

替

壮麗なくこの山里と詠めける
姫崎野の方の秋の空



百九

羽

衣

七寶充滿の寶をふらし



百拾

羽

衣

春かすかたなひきにけり久方の

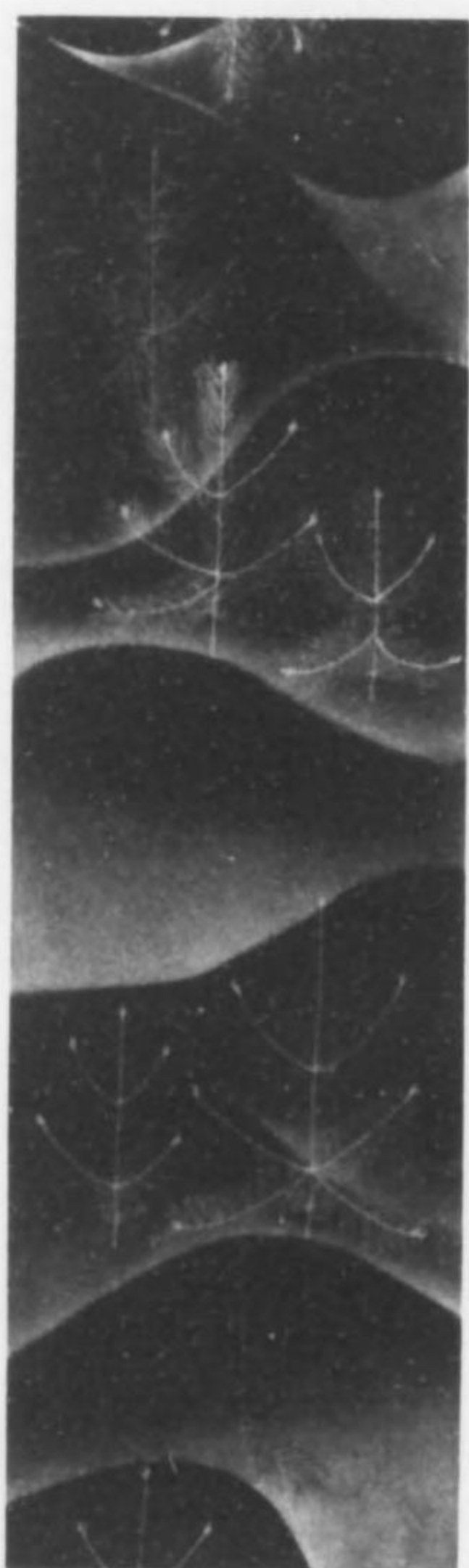


百拾壹

高

砂

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならで



300
67

昭和十年十月五日印刷
昭和十年十月十日發行

定價 金 八 圓

不許
複製

編者
印行者

株式會社
安藤商店意匠部
會社名
芸艸堂出版部
京都市中京區寺町二條南入

發行所

合名會社 芸艸堂
本店 京都市寺町二條南
支店 東京本郷湯島一丁目
電話 上二五九〇
下二六〇〇
九〇〇〇

終

